

湯川
山天
人

天ヶ瀬温泉街復興まちづくり計画

(令和5年～令和14年)

令和5年3月策定 日田市

目次

序章 天ヶ瀬温泉街復興まちづくり計画とは.....	1	第3章 復興まちづくりの分野別取組.....	31
1. 計画策定の背景と目的.....	1	【安全安心】.....	32
2. 計画の位置づけと役割.....	2	1. 地域防災力向上のための取組	
3. 計画の対象区域.....	3	2. 災害伝承に関する取組	
4. 計画策定の体制.....	4	【観光・商業振興】.....	36
第1章 天ヶ瀬温泉街の現況と課題.....	5	3. 地域経済の活性化に資する取組	
1. 上位計画・関連計画の整理.....	5	【公共デザイン】.....	40
2. 被災状況の整理.....	6	4. 歩いて楽しいエリアに向けた公共空間の整備と利活用	
3. 地域の概要.....	11	5. エリアの景観形成に向けた取組	
4. 住民意見の整理.....	18	【夜間景観デザイン】.....	49
5. 復興まちづくりに向けての課題.....	23	6. 安心・愛着・誘客に向けた夜間照明デザイン	
第2章 復興まちづくりで目指す将来像.....	25	第4章 復興まちづくりの推進方策.....	65
1. 復興まちづくりのコンセプト.....	25	1. 計画推進に関する基本方針.....	65
2. 復興まちづくりの基本方針.....	26	2. 計画推進体制.....	67
3. 天ヶ瀬温泉街の将来イメージ.....	27		

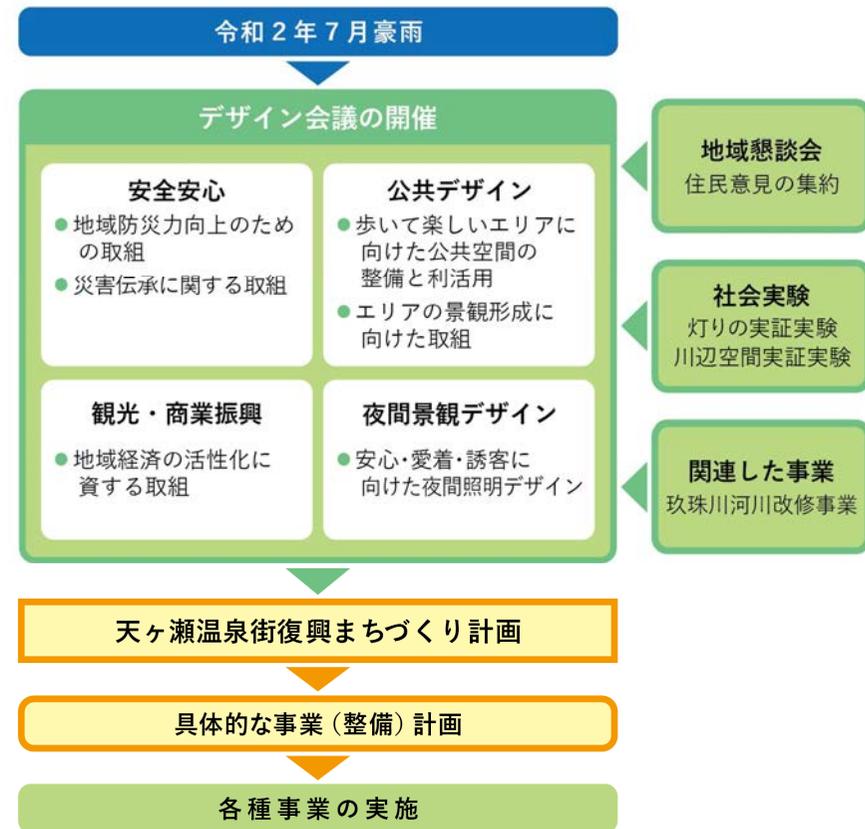
1.計画策定の背景と目的

天ヶ瀬温泉は、別府や湯布院とともに豊後三大温泉に数えられ、豊後國風土記にも記録が残る歴史ある温泉地です。玖珠川沿いの山間狭隘地形にある天ヶ瀬温泉街は従前より頻繁に洪水が発生していますが、令和2年7月豪雨による洪水は特に規模が大きく、温泉街の大部分が浸水し甚大な被害が発生しました。

この災害からの復興を目指し、地域住民がまちの将来像を描いた「天ヶ瀬温泉街復興ビジョン」を策定しました。

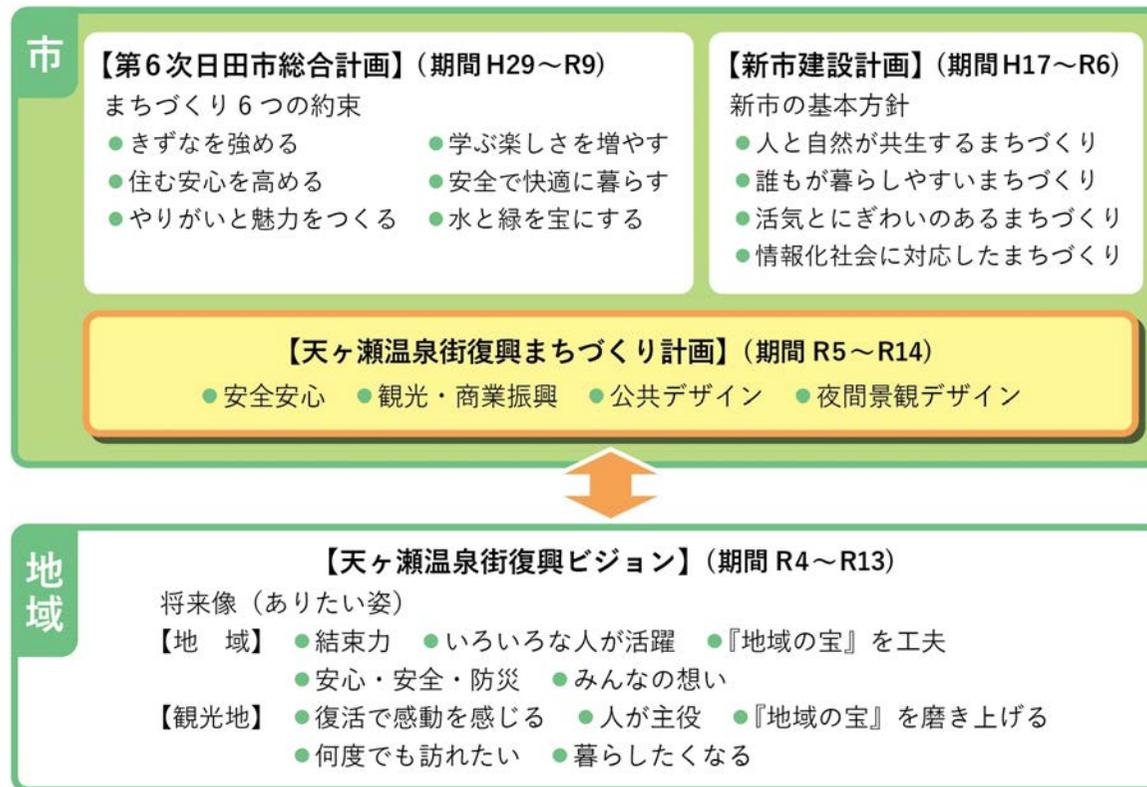
また、大分県は今後の浸水被害を軽減するため玖珠川の河川改修事業に着手しました。

本市においては、復興ビジョンに描かれた将来像の実現に向け、課題整理や整備方針・まちのデザイン等をまとめ、災害に強いまちづくりと温泉街の活性化や賑わい創出を図ることを目的とした「天ヶ瀬温泉街復興まちづくり計画」を策定しました。



2.計画の位置づけと役割

本計画は、復興に向けて取り組むべき内容を整理し、市の最上位計画である「第6次日田市総合計画」との整合性を図るとともに、地域住民によって策定された「天ヶ瀬温泉街復興ビジョン」に描かれた将来像の実現に向けて、まちのデザイン等、具体的な取組を「天ヶ瀬温泉街復興まちづくり計画」に位置付けて推進します。



序 章：天ヶ瀬温泉街復興まちづくり計画とは

3.計画の対象区域

◇計画の対象区域

計画の対象区域は玖珠川や国道 210 号を含む、天ヶ瀬温泉街全体とします。



4.計画策定の体制

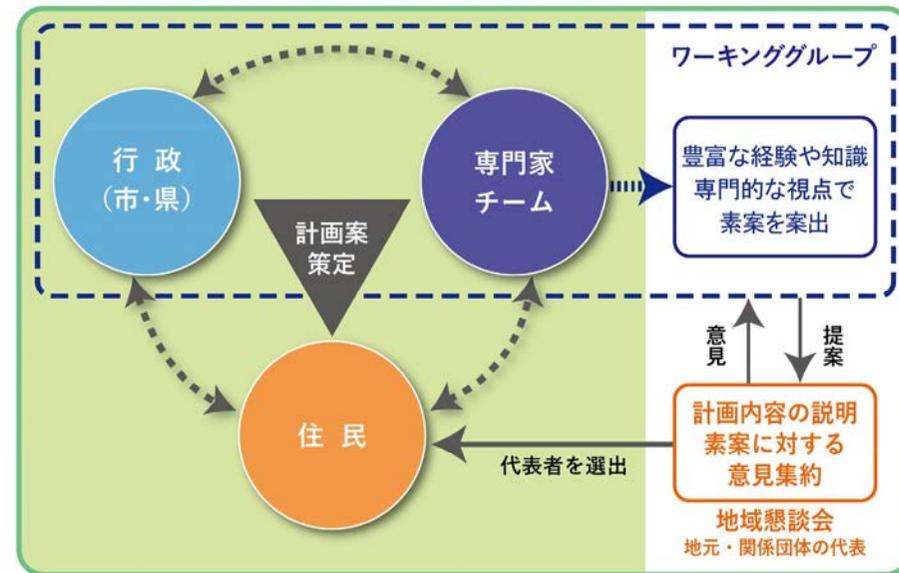
本計画の策定にあたっては、天ヶ瀬温泉街デザイン会議により計画案の検討を行い、地域懇談会にて意見を集約し、最終的に日田市として取りまとめました。

◇天ヶ瀬温泉街デザイン会議

- ・行政（市、県）、専門家チーム、地域の代表者により組織されます。
- ・計画書案の検討を行います。

◇地域懇談会

- ・地域住民や関係団体により組織されます。
- ・デザイン会議で検討した計画案をもって地域懇談会を開催し、計画内容の説明、意見の集約を行います。



【各会議の開催状況】

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回
デザイン会議	2022年8月1日	2022年10月6日	2022年12月2日	2023年1月30日	2023年3月20日
地域懇談会	2022年9月8日	2022年10月15日	2022年12月2日	2023年1月30日	—

1.上位計画・関連計画の整理

(1) 日田市総合計画

総合計画は、市の最上位計画として総合的かつ計画的な市政運営を行うための方針となるものです。「ともにつくる 一人ひとりが主役の ひと」を市の将来像に掲げた第6次日田市総合計画は、これまでの総合計画と同様に市政運営の基本事項としての計画であるとともに、市民と行政が理念を共有し、協働してまちづくりを進めるための指針として策定しています。天ヶ瀬温泉街においても、総合計画に定められている「まちづくり6つの約束」に沿ってまちづくりを進めます。

(2) 新市建設計画

本計画は、日田市、前津江村、中津江村、上津江村、大山町、天瀬町の合併後の新市を建設していくための基本方針、主要施策を定め、その実現を図ることにより、6市町村の速やかな一体化を促進し、住民福祉の向上と地域の特性を活かした発展を図ろうとするものです。新市は3つのゾーンに分類され、天ヶ瀬温泉街は「保養・交流ゾーン」に位置しています。温泉保養地としての魅力の向上に努めるとともに、来訪者との交流の拡大により地域の活性化と定住の促進を図ります。

(3) 天ヶ瀬温泉街復興ビジョン ～「川と湯のまち天ヶ瀬」の復活～ （参考資料参照）

本ビジョンは、天ヶ瀬温泉街の復興をめざすもので、地域住民自らが知恵を絞り、力を合わせ、汗をかき、ともに喜びを分かち合うことに重点を置いたビジョンです。行政や関連団体の事業計画（長期計画・年度計画）への提言を通して反映される事を目指します。他所にはない天ヶ瀬温泉街ならではの『地域の宝』を磨き上げ、「住む場所」と「観光地」としての価値を高め「復興・復活」するために、10年後に3つの目標（①住民の暮らしの満足度向上、②住民数の増加、③観光消費額の回復）の実現を目指します。

2.被災状況の整理

(1) 令和2年7月豪雨の概要

令和2年7月6日～8日にかけて梅雨前線が九州付近に停滞し、記録的な大雨を降らせました。

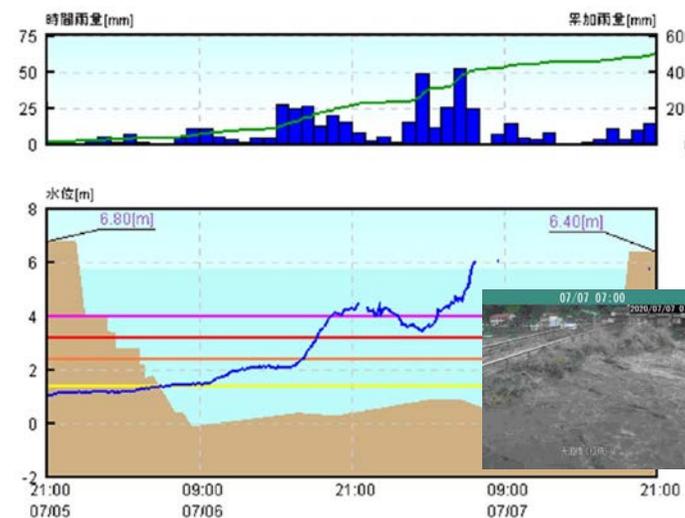
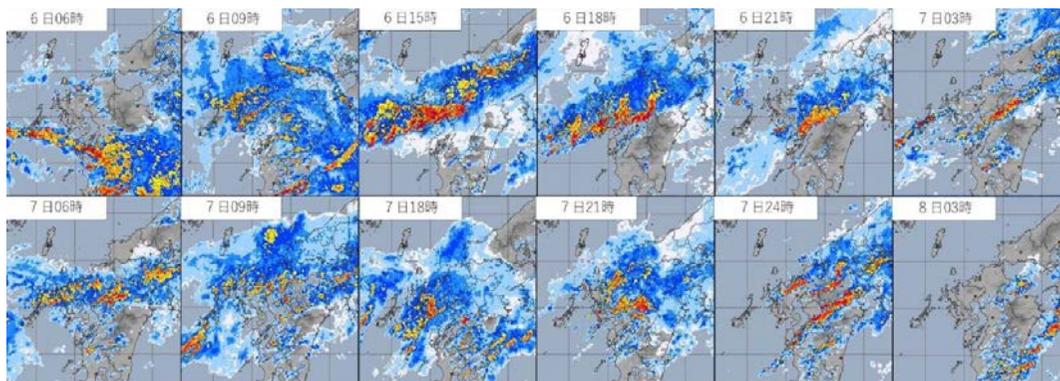
大分県西部を中心に8地点で24時間降水量が250ミリを超え、これまでの記録を更新する大雨となりました。玖珠では24時間降水量310.0ミリを観測、日田市では24時間降水量272.0ミリ、椿ヶ鼻（日田市）では24時間降水量497.0ミリを観測しました。特に玖珠と椿ヶ鼻では観測史上1位の記録を更新しました。また天瀬では7月7日に記録的短時間大雨情報が発表されました。

■ 降雨の状況

単位:mm

	1時間	3時間	6時間	12時間	24時間	48時間
①玖珠	57.5	92.5	135.5	186.0	310.0	493.5
②日田	40.0	77.0	114.0	163.5	272.0	461.5
③椿ヶ鼻	80.5	136.0	185.0	308.0	497.0	792.5

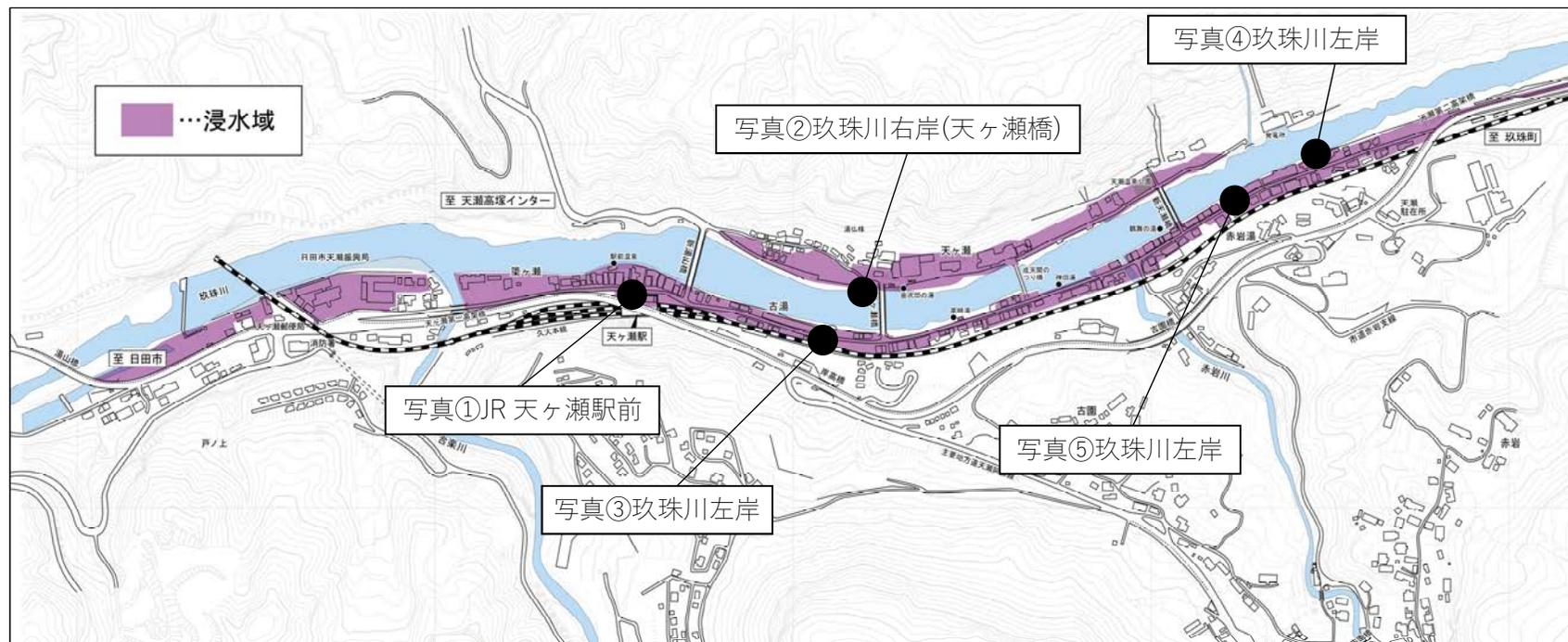
※ は観測史上最大値



(2) 浸水被害

令和2年7月豪雨により玖珠川が氾濫し、天ヶ瀬温泉街の大部分を洪水が襲いました。多くの住家で浸水被害を受け、高いところでは約2.5mの浸水(痕跡水位)が確認されました。

浸水範囲



※番号位置での浸水調査写真を次のページに整理しています。

■ 浸水調査写真



写真①JR 天ヶ瀬駅前



写真②玖珠川右岸(天ヶ瀬橋)



写真③玖珠川左岸



写真④玖珠川左岸



写真⑤玖珠川左岸

第1章：天ヶ瀬温泉街の現況と課題 … 2.被災状況の整理

(3) 日田市の被害状況

令和2年7月豪雨災害 日田市復旧・復興推進計画

「VI日田市の被害状況」より整理します。

令和4年7月1日時点

被害種別			単位	被害状況
人的被害	死亡		人	1
	負傷者	重傷者	人	0
		軽傷者	人	2
住家被害	全壊		棟	53
	半壊		棟	88
	一部損壊		棟	68
	床上浸水		棟	52
	床下浸水		棟	72
	合計		棟	333
非住家被害			棟	140
住民の孤立	(最大)	地区数	地区	10
		世帯数	世帯	66
		人数	人	158
避難者等の状況	(最大)	避難所数	地区	54
		世帯数	世帯	265
		人数	人	517
避難勧告等の発令状況(最大)	避難準備・高齢者等避難開始	世帯数	世帯	23,664
		人数	人	55,340
	避難勧告	世帯数	世帯	11,596
		人数	人	26,453
	避難指示	世帯数	世帯	27,555
		人数	人	64,835

令和4年7月1日時点(被害額：百万円)

被害種別		被害状況	
社会インフラ関係	道路(橋梁含む)	箇所	365
		被害額	3,958
	河川	箇所	114
		被害額	6,299
	砂防設備	箇所	34
		被害額	1,556
	上水道	箇所	9
		被害額	211
	公営住宅	箇所	2
		被害額	43
農林水産関係	農業関係	箇所	665
		被害額	1,224
	林業関係	箇所	177
		被害額	1,499
	漁業関係	箇所	7
		被害額	10
商工・観光関係		箇所	96
		被害額	3,242
社会福祉関係		箇所	4
		被害額	649
教育関係		箇所	6
		被害額	46
その他		箇所	1
		被害額	8
合計		箇所	1,480
		被害額	18,745

(4) 被害状況写真



JR 天ヶ瀬駅前



天ヶ瀬橋左岸



天ヶ瀬橋左岸



天ヶ瀬橋



天ヶ瀬橋右岸



新天ヶ瀬橋流失

3.地域の概要

3.1 天瀬地区の形成史

(1) 原始・古代

天瀬地区には亀石山遺跡や宇土遺跡など、主要なものだけでも24の遺跡があり、それらの発掘調査などから旧石器時代・縄文時代から人々の暮らしが営まれていたことがうかがわれます。

また、天瀬地区が文献に初めて登場する奈良時代の『豊後國風土記』には、古代に「五馬媛」がこの地を治めていたとみられる記述があります。

(2) 中世

古来より天瀬地区は五馬荘に属していたとされ、その名称については室町中期の享徳2年(1453年)山中薬師堂、応仁2年(1468年)玉来神社の棟札に記録が残されており、中世の往来の歴史から豊後国府、肥後菊池とのつながりも推測されることから、五馬荘が九州内陸部における東西交通の要衝であったことがうかがわれます。

(3) 近世

近世に入ると天瀬地区について記された文献も増え、『豊後國郷帳』等に詳細な記録が残されています。天ヶ瀬温泉という名称は廣瀬淡窓の『懐旧樓筆記』(1792年)や江戸時代に書かれた『日田郡志』にも残されています。

(4) 明治・大正

天瀬地区は廃藩置県により、明治4年11月に大分県に入り、明治22年に中川村、馬原村、五馬村の3村に集約されています。

天ヶ瀬温泉には旅館11戸、飲食店5戸という記録が残されており、現在の国道210号は県道大分・福岡線として大正15年竣工し、天瀬が発展する礎となりました。

(5) 昭和

久大本線は大正時代に一部開通していましたが、久留米~大分間を直通させようと当時の村長が鉄道大臣に陳情書を提出しました。昭和9年に日田~天ヶ瀬間が開通し、久大本線の全線がつながりました。

昭和28年に発生した水害では天ヶ瀬温泉の旅館、商店を含めて流出・全壊家屋が84戸に達しましたが、温泉街の復興は急ピッチで進められ、同年11月には工事が完成しました。

町村合併促進法(昭和28年施行)により中川村、馬原村、五馬村の3村が合併、昭和41年臨時議会での決定により天瀬町が誕生して以降は、県内有数の温泉地として発展を続けてきました。

3.2 地理的構造

(1) 天ヶ瀬温泉街の地形

天ヶ瀬温泉街は日田市の南東にある天瀬町の中心に位置しています。温泉街を流れる玖珠川は、両岸が切り立った渓谷状となっており、川底には巨石が多く、渓谷美をみせています。支川の赤岩川では山伏滝を、合楽川では桜滝をそれぞれ有しており、すぐれた景観をみせています。天ヶ瀬温泉街は、そのような狭隘な地形と、玖珠川沿いに張り付くように連なる街並みが特徴の温泉街です。



日田市街地から
天ヶ瀬温泉街ま
での距離は、車で
約20分(約14km)



3.3 人口推移

(1) 国勢調査にみる天瀬町の総人口について

昭和30年（1955年）にピーク約1万3千人。その後昭和40年（1965年）まで漸減、昭和40年（1965年）から昭和45年（1970年）までの5年で13.6%と急減しています。昭和45年（1970年）以降は徐々に減少し平成27年（2015年）では約5千人とピーク時の約3分の1に近い人口となっています。

なお、社人研の推計によると20年後には約3千人になると見込んでいますが、これはピーク時の4分の1になります。

(2) 人口ピラミッドについて

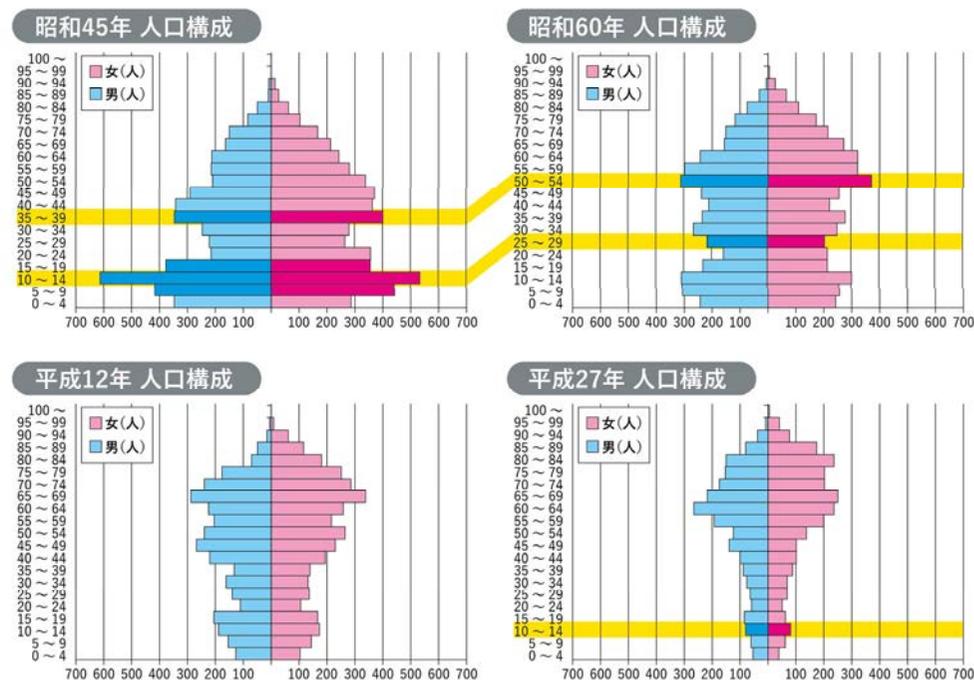
人口の減少傾向が顕著になった昭和45年（1970年）の人口ピラミッドをみると、それでもまだピークは10～14歳にあって1100人を越え、前後の5～9、15～19歳の層も厚く、その親世代の35～39歳に二つ目のピークがあります。15年後の昭和60年（1985年）までにもし域外流出がなければ昭和45年（1970年）の10～14歳の層は25～29歳の層に移行するので、人口ピラミッドでこの層がピークを形成するはずですが、実際には400人強となっており、この間に約3分の2の人が域外に流出したものとみられます。

因みにこの15年間のもう一つのピークを形成する親世代（35～39歳）の推移をみると、約750人から約680人とその減少はわずかであるものの、10～14歳層は約1100人から約600人と

大幅に減少しています。やはりこの時期の若年層の激減が人口減少に大きな影響を与えたものと思われます。

以降、若年層は減少の一途をたどって、直近の平成27年（2015年）では10～14歳が男女とも100人を割る構成となっています。

天瀬町の人口ピラミッド（昭和45年～平成27年）



3.4 産業活動

天ヶ瀬温泉は豊富な温泉に加え、地域資源を活かしたまちづくりをおこなってきました。川(鮎・ヤマメ)や山(シイタケ・梨)の産物、温泉熱を利用したイチゴやバラの栽培、雄大な景色を有する五馬高原、多くの参拝客が訪れる高塚愛宕地蔵尊など温泉街周辺にある様々な地域資源と連携し、温泉観光地としての発展を続けてきました。

温泉街の主要産業である観光について「観光入込客・宿泊客数の推移」から考察します。

(1) 天瀬地区の観光入込客・宿泊客数の推移

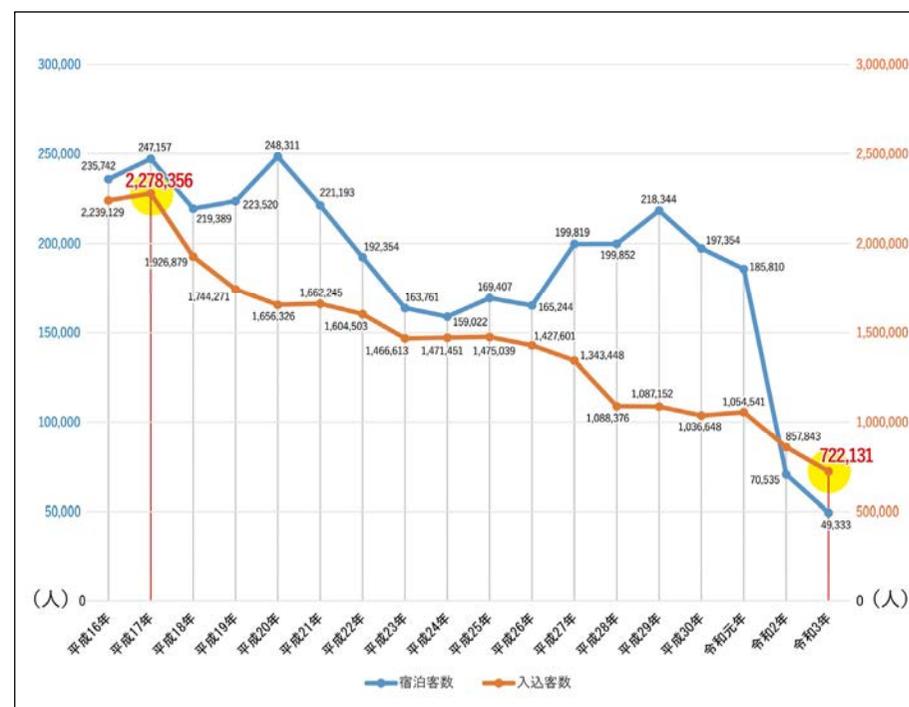
入込客数が平成17年(2005年)の約228万人から直近で約72万人と大きく減少しています。

その理由としては宿泊客の方に減少傾向とはいえ固定客(なじみ客)がついているのに対して、日帰りもしくは通過・回遊型観光客にとっての魅力が薄れていることが考えられます。

前述のように地域経済に効果をもたらすのは宿泊客ですが、入込客もまた知名度を高め、その何割かが宿泊客になり得るという点から重要です。

宿泊客数は雇用面を含めて地域経済に最も大きな影響を与える指標であり、その推移はそのまま地域の活性につながるのですが、天瀬地区におけるこのような顕著な減少は利用者の観光行動の変化によるものと考えられます。(団体旅行から家族・個人旅行への移行など)

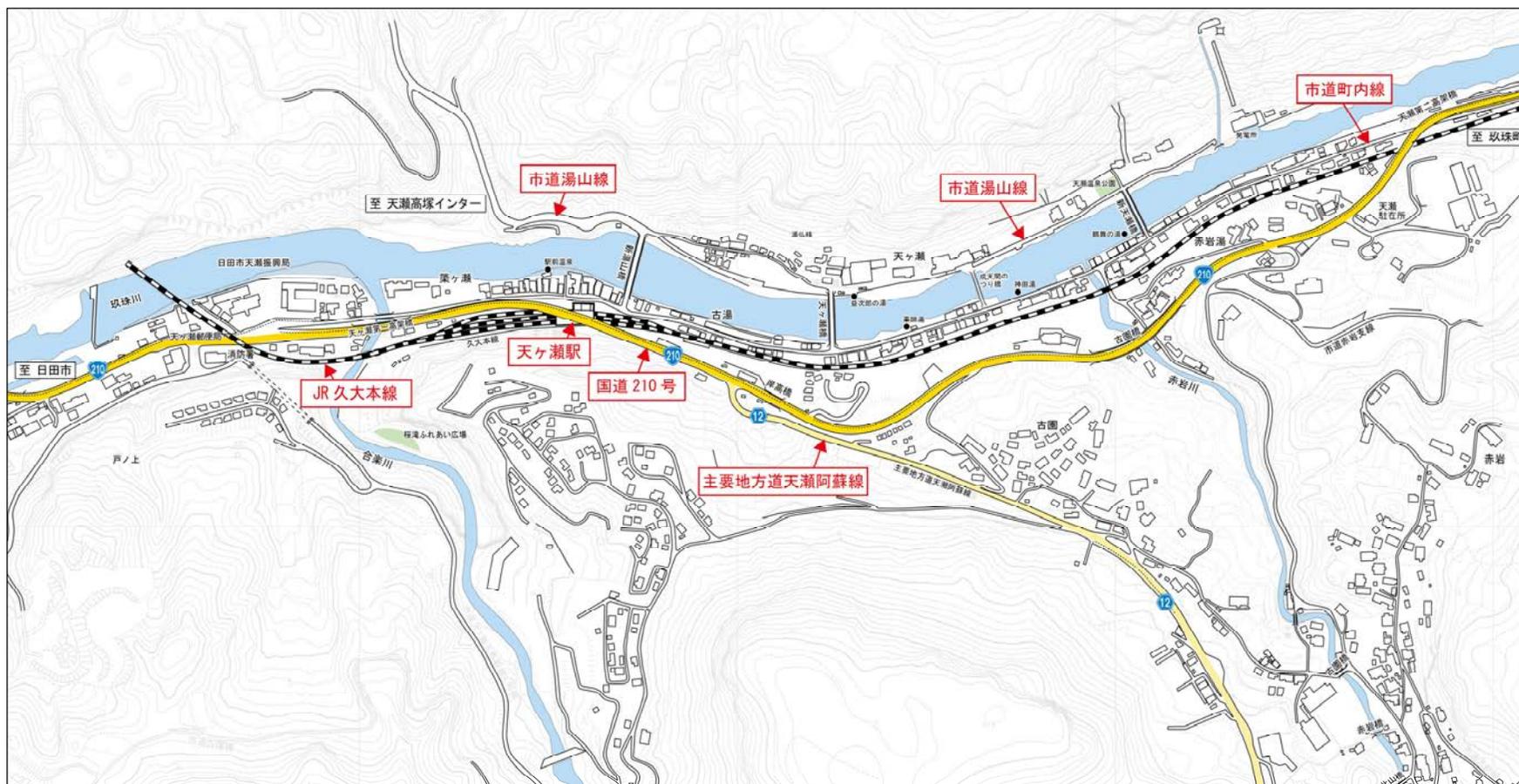
令和元年(2019年)～令和3年(2021年)にかけて宿泊客数、入込客数がともに大きく減少しています。これは新型コロナウイルスによる非常事態宣言や移動制限が大きな原因と考えられます。



天瀬地区の観光客のグラフ (左軸：宿泊客数、右軸：入込客数)

3.7 交通基盤の状況

鉄道は久大本線が通り、天ヶ瀬駅があります。道路は国道210号が通り、地域間交通の主要な役割を担っています。また主要地方道天瀬阿蘇線が本地域と阿蘇方面を結び、市道湯山線・町内線が生活道路の役割を担っています。



4.住民意見の整理

住民意見の把握について、以前に行われたアンケート調査や実証実験におけるアンケート結果をもとに整理を行いました。

令和2年10月23日 アンケート調査

令和3年6月26, 27日 アンケート調査

令和4年2月5日～3月5日 灯りの実証実験

令和4年8月10日～9月30日 川辺空間実証実験

令和2年10月の調査では、被災直後ということもあって、不安要素が大きく、「生活用品、食料品の販売者がいない」等、生活に関わる切実な意見がありました。被災以前から人口減少の問題を抱えるだけに、被災によってさらに人口減少が進むのではないかと、観光客の減少、収入の減少につながるのではないかと不安が調査結果に表れていました。また「温泉街のイメージをどう回復するか?」という前向きな意見もありました。「珍珠川の増水はこれからもあることを前提に河川改修を考えて欲しい」という意見もありました。(表4.1参照)

表4.1 天ヶ瀬温泉街復旧・復興に関する説明会時のアンケート結果一部抜粋 (R2.10.23)

意見等
生活用品、食料品の販売者がいない。
人口減少が不安。
観光客の減少が不安。
収入減少が不安。
珍珠川の増水はこれからもあることを前提に河川改修等を考えて欲しい。
温泉街のイメージをどう回復するのか考えて欲しい。
河川の堆積物の除去、河川の掘削を早急に実施すべき。
河川とは別に温泉街の復興を考えて欲しい。
全半壊した建物を撤去した後に更地にし、温泉街をアウトドアの聖地として再生してはどうか。
桜滝をメインにPRしてはどうか。

第1章：天ヶ瀬温泉街の現況と課題 … 4.住民意見の整理

次に令和3年6月の調査をみると、被災から1年ほどが経過し不安は残るものの、前向きな意見も出てきていました。「天瀬の歴史資料を展示する場所が欲しい」、「商店街を復活させる方法を考えて」、「川辺を歩いて景観がきれいな川にしたい」、「パラペット堤防にデザイン性を持たせたい」、「河川で遊び、温泉を楽しみ、散策を楽しめるようにしてほしい」といった意見がありました。(表4.2参照)



天ヶ瀬温泉街復旧・復興に関する説明会の様子

表 4.2 天ヶ瀬温泉街復旧・復興に関する説明会時のアンケート結果一部抜粋 (R3.6.26)

意見等
再度、被災しないか不安。
観光客の減少が不安。
家屋・人口の減少が不安。
新天瀬橋の流出で生活が安定しない。
湯温が低下しており心配。
住民の自助を促す施策が必要。
色やデザインの統一感のあるまちにして欲しい。
温泉を活かしたまちづくりにして欲しい。
河川で遊び、温泉を楽しみ、散策を楽しめるようにして欲しい。
商店街を復活させる方法を考えて。
天瀬の歴史資料を展示する場所が欲しい。
パラペット堤防にデザイン性を持たせたい。
泉源を守りつつ、住みやすいまちづくりをお願いしたい。
子供が遊べる浅瀬が欲しい。
川辺を歩いて景観がきれいな川にしたい。

第1章：天ヶ瀬温泉街の現況と課題 … 4.住民意見の整理

本計画策定のため実施された「地域懇談会」による住民意見では、個人的な要望というよりも地域全体を加味した復興まちづくりを考えたいという意見が多く、例えば「温泉街の回遊性を意識した計画として欲しい」、「温泉街を歩いてくれる仕掛けづくりが必要」、「水害の伝承館を防災拠点としたらどうか」といった意見がありました。(表 4.3 参照)



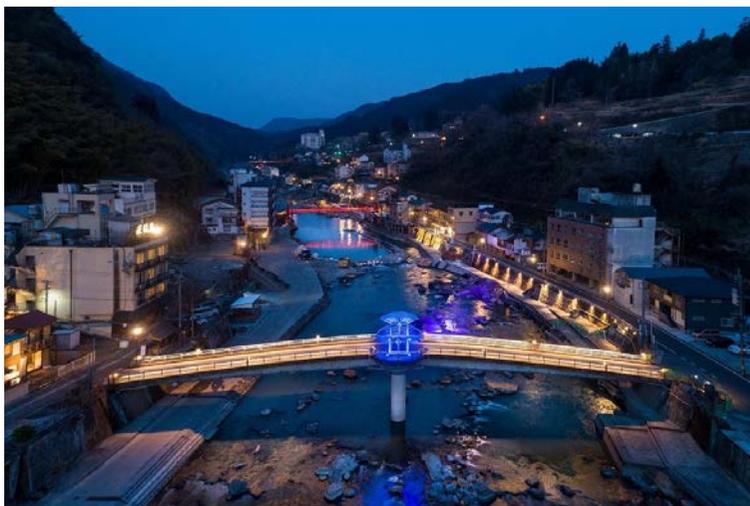
地域懇談会の様子

表 4.3 「地域懇談会」で出た意見一部抜粋

意見等
駐車場にするなど久寿屋の跡地の活用も必要。
温泉街の回遊性を意識した計画として欲しい。
河川改修は人が川に近づきやすい計画として欲しい。
温泉(泉源)を残して欲しい。
温泉街を歩いてくれる仕掛けづくりが必要と考える。
水害の伝承館を防災の拠点としたらどうか。
駐車場を左右岸上下流に確保し、まちなかを回遊できるようにしてほしい。
山伏滝の付近を改修することはできないのか。 山伏滝も回遊に繋がるように手を加えてほしい。
天ヶ瀬は天の川に見立ててまちおこしをしていた。再現したらどうか。
モダンな天の川 (ミルクウェイ) イメージでライトアップしてはどうか。
バイパスからも眺められるような温泉街にしてはどうか。
カラリング等、天ヶ瀬温泉街も統一感が出るようにしてはどうか。
避難所での備品の提供(貸出)等の対応をしっかりとって欲しい。
川辺のキラキラした遊びを実現できればいいと思う。特に子供は長いリピーターとなるので、天ヶ瀬にも遊ぶところ(アクティビティ)が多いといいと思う。
トイレを新設する場合、既存の川湯とあわせて管理方法を考えて欲しい。

第1章：天ヶ瀬温泉街の現況と課題 … 4.住民意見の整理

「令和3年度 灯りの実証実験」のアンケート結果では、灯りの設置に対して肯定的な意見がほとんどであり、例えば「天ヶ瀬温泉街を明るくするため、今後も続けていくべき」、「暖かな灯りがともり心も暖かな気分になりました」、「木々が光っていたり、川が照らされていたり、橋の上から眺めてみるととても素敵でした」といった意見がありました。また、「暗いホテル街には灯りが必要」「温泉街の防犯強化につながると思います」といった、地域での安全・安心につながるといったような意見もありました。(表4.4 参照)



灯りの実証実験の様子

表4.4「令和3年度 灯りの実証実験」で出た意見一部抜粋

意見等
天ヶ瀬温泉街を明るくするため、今後も続けていくべき。
寒い中一生懸命準備している若者たちの思いがこもったライトアップに先ず感動しました。
暖かな灯りがともり心も暖かな気分になりました。
暗いホテル街には灯りが必要。
木々が光っていたり、川が照らされていたり、橋の上から眺めてみるととても素敵でした。
もっと照らす場所を増やすか、スポット的にインスタ映えする箇所をつくるとより良いかと思います。
灯りが増えて街の雰囲気良くなったと思います。飲食などのイベント回数が多いとより来やすいと思いました。
温泉街の防犯強化につながると思います。
天ヶ瀬は良いと思ってイベントをやってみても、いつも一回で終わる。続けて恒例行事にして欲しい。
灯りのない場所はやはり暗く感じたので、温泉街全体があかりを灯して、明るくなるともっと魅力的だと思いました。
温泉街、川浴いが明るくなって歩きやすい。

第1章：天ヶ瀬温泉街の現況と課題 … 4.住民意見の整理

「令和4年度 川辺空間実証実験」のアンケート結果では、「川沿いで風を感じられてとても気持ちよかったです」「川を中心とした取り組み楽しいです」といった声があり、満足度が高かったことがうかがえました。アクティビティ毎にもアンケートが行われており、今回の取組にかなり満足していただいております、次回開催の際にも参加したいという声が多くありました。（表4.5参照）



川辺空間実証実験の様子

表 4.5「令和4年度 川辺空間実証実験」で出た意見一部抜粋

意見等
川にマッチして良かったです！釣り最高！
とても良い体験ができました。子供向けの川遊びプランをもっと充実してもらいたいです。あと、フォレストアドベンチャー的なものや川の中が覗ける舟等があると良いと思います。
川沿いで風を感じられてとても気持ちよかったです。
川でSUPとボルダリングをしましたが、温泉や休憩スペースが真横にあり、アウトドアのスポットとしてすごく魅力的な場所だと思いました。
川床は日中暑かったので、短時間でしか利用しなかった。夜の方が利用しやすいかも。
川を中心とした取り組み楽しいです。
温泉卵楽しくできました！旅館の人も優しかった！
川で遊んで温泉に入れる最高の川です！
普段体験できないことや、初めて知る事があり良かった。また行きたい。
孫が初めてのボート体験で楽しそうに遊んでいて、ぜひまた来年も参加したいです。
家族が楽しめるイベントがあれば参加したい。
旅館とコラボぜひ定期的にやって欲しい、ぜひ続けて欲しい取り組みです！

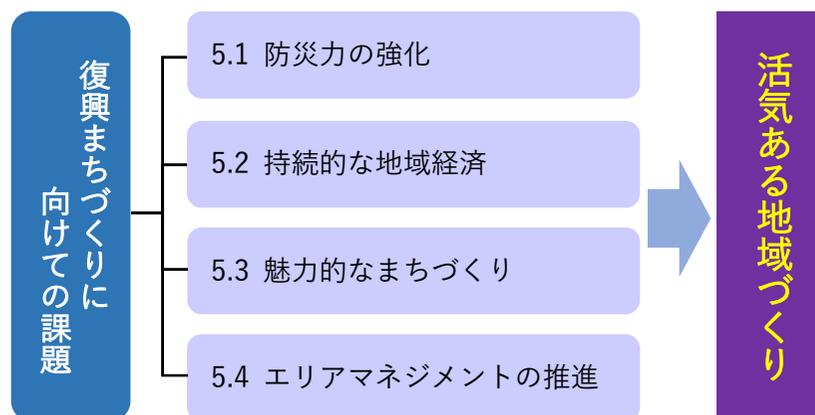
5.復興まちづくりに向けての課題

これまで上位・関連計画、天ヶ瀬地区の歴史、地域の概要について整理・分析を行いました。

あらためてみると被災以前から人口や観光客が減少していることが明らかになりました。また、これまでに実施した住民調査から、被災により生活基盤が脅かされ不安を抱えている一方で、より良い天ヶ瀬温泉街に向け住民自らが取り組みたいという気持ちがあることがわかりました。

これらの状況を踏まえ、天ヶ瀬温泉街では「防災・減災」、「定住・交流人口の増加」、「コミュニティの強化」など地域の活性化に取り組み、災害に強く魅力あふれるまちづくりを目指します。

そのため、まちづくりの課題を次のとおり整理します。



5.1 防災力の強化

天ヶ瀬温泉街は以前から度重なる水害に見舞われており、今後も地形や気象の特性から水害が発生する可能性があります。

地域住民が安全・安心な生活を営むためには、治水対策と併せ、防災・減災に対する自助・共助の取組が必要となります。

また、次の災害に備える教訓とするため、令和2年7月豪雨災害による被災状況を伝承する取組も必要となります。

5.2 持続的な地域経済

(1) 商業振興

以前から温泉観光地として発展してきた天ヶ瀬温泉街は、旅館業とともに飲食店や土産店といった販売業も活発に行われていましたが、近年では旅行ニーズの変化や新型コロナウイルス感染拡大、豪雨被災により商業活動も衰退しています。

温泉街における商業と観光は関係しており、商業の活性化には、観光地としての魅力を向上させる必要があります。

選ばれる温泉観光地の要素として、そぞろ歩きを楽しめる環境が必要であり、回遊性を高めるための多様な店舗の出店が望まれています。

(2) 遊休不動産の有効利用

人口減少や被災により天ヶ瀬温泉街には、多くの空き地や空き家が存在しています。まちなかの賑わい創出のため、新規出店スペースの確保等、有効活用を図る必要があります。

(3) 観光振興

旅行や観光に求められる目的は変化しており、従来のような旅館で完結するものではなく、地域全体で観光客をもてなす取組が必要となっています。

天ヶ瀬温泉が持つ特有の食や文化、玖珠川沿いの景観や川空間のアクティビティ等、天ヶ瀬温泉ならではの魅力に磨きをかけ、選ばれる温泉観光地に向けた取組が必要となります。

5.3 魅力的なまちづくり

(1) 癒される河川景観の形成

天ヶ瀬温泉街は、まちの中心を流れる玖珠川沿いに広がる立体的なまちなみが特徴であり、川沿いの休憩や散策など癒しを与える河川空間の活用が求められています。

(2) 歩きたくなるまちなみ景観の形成

温泉街の回遊性を高めるには、歩きたくなるようなまちなみと最適な散策ルートが求められており、温泉街に調和した景観の形成に取り組む必要があります。

(3) 夜間景観の形成

夜の回遊性や賑わい創出には、夜間景観が重要なコンテンツであり、町全体の雰囲気考えた灯りの取組が必要となります。

5.4 エリアマネジメントの推進

エリア価値の向上には施設整備やまちづくり活動に多様な関係者が携わる体制の構築が必要となります。また、持続的な温泉街のまちづくりを推進するには、企画立案や運営を担う人材の確保や育成も必要となります。

1.復興まちづくりのコンセプト

天ヶ瀬アドベンチャー

『湯・川・山・天・人』

すべてが天ヶ瀬温泉街の魅力

自然に学び、人とふれあい、湯に癒される

自然の猛威に遭い、自然の怖さを再認識し、新しい温泉街へ

新しいまち旅の出発

自然と共生し、魅力あるまちづくりへの冒険

楽しんで、学んで、癒されて、多くの人々のアドベンチャーフィールドへ

親しめる川、遊べる川、癒される川へ

楽しく歩ける街、癒される空間、夜も魅力的な景観へ

住んでいる方、訪れる方、事業者、起業者、すべての方に魅力的な天ヶ瀬温泉街となるべく

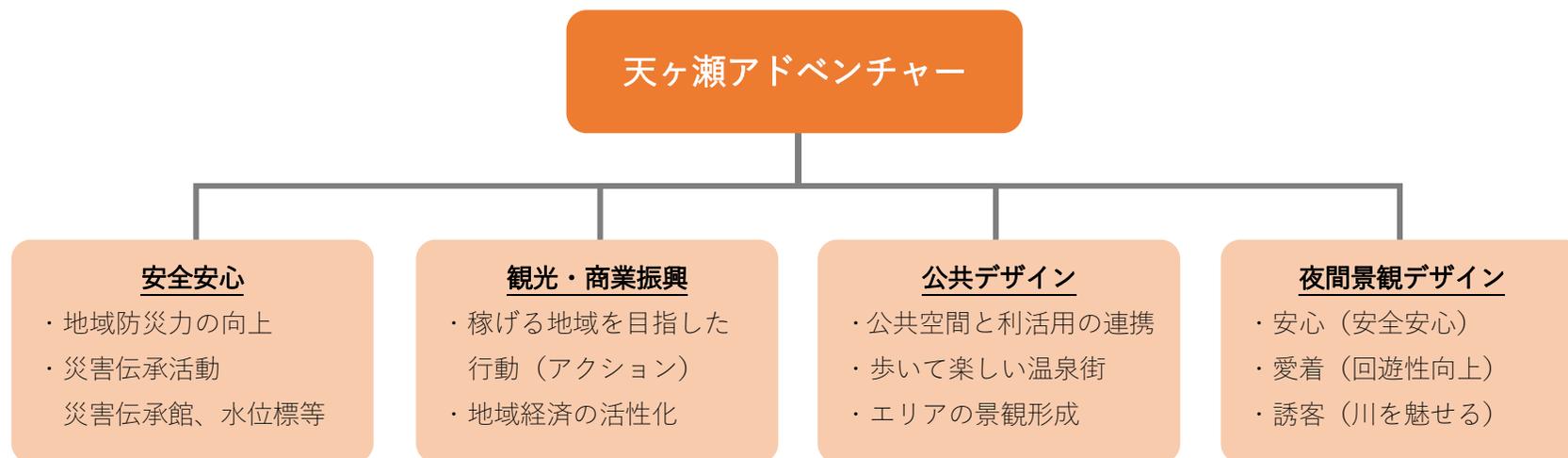
「天ヶ瀬温泉街復興まちづくり計画」を推進します

2.復興まちづくりの基本方針

ここでは、第1章で述べた現況と課題を踏まえ、コンセプトに基づいた復興まちづくりの基本方針を整理します。

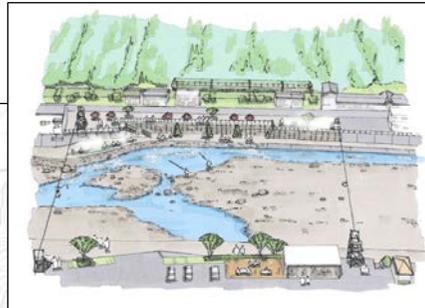
天ヶ瀬温泉街の魅力である『湯・川・山・天・人』を活かした新たなアドベンチャーフィールドとして生まれ変わるべく、自然と共生し、自然に学び、人々がふれあい、温泉に癒されるまちを目指します。

温泉街が持つ誘客力や経済力を更に活性化させるよう、玖珠川に「歩いて楽しい川辺空間」や「美しい夜間景観」など親しみ・遊び・学び・癒しの空間を創出し、地域住民に愛され、観光客に感動を与え、温泉街に集う人々により賑わいが生まれ、活気あるまちの実現に向け、4つの柱を軸とした『天ヶ瀬アドベンチャー』を推進します。

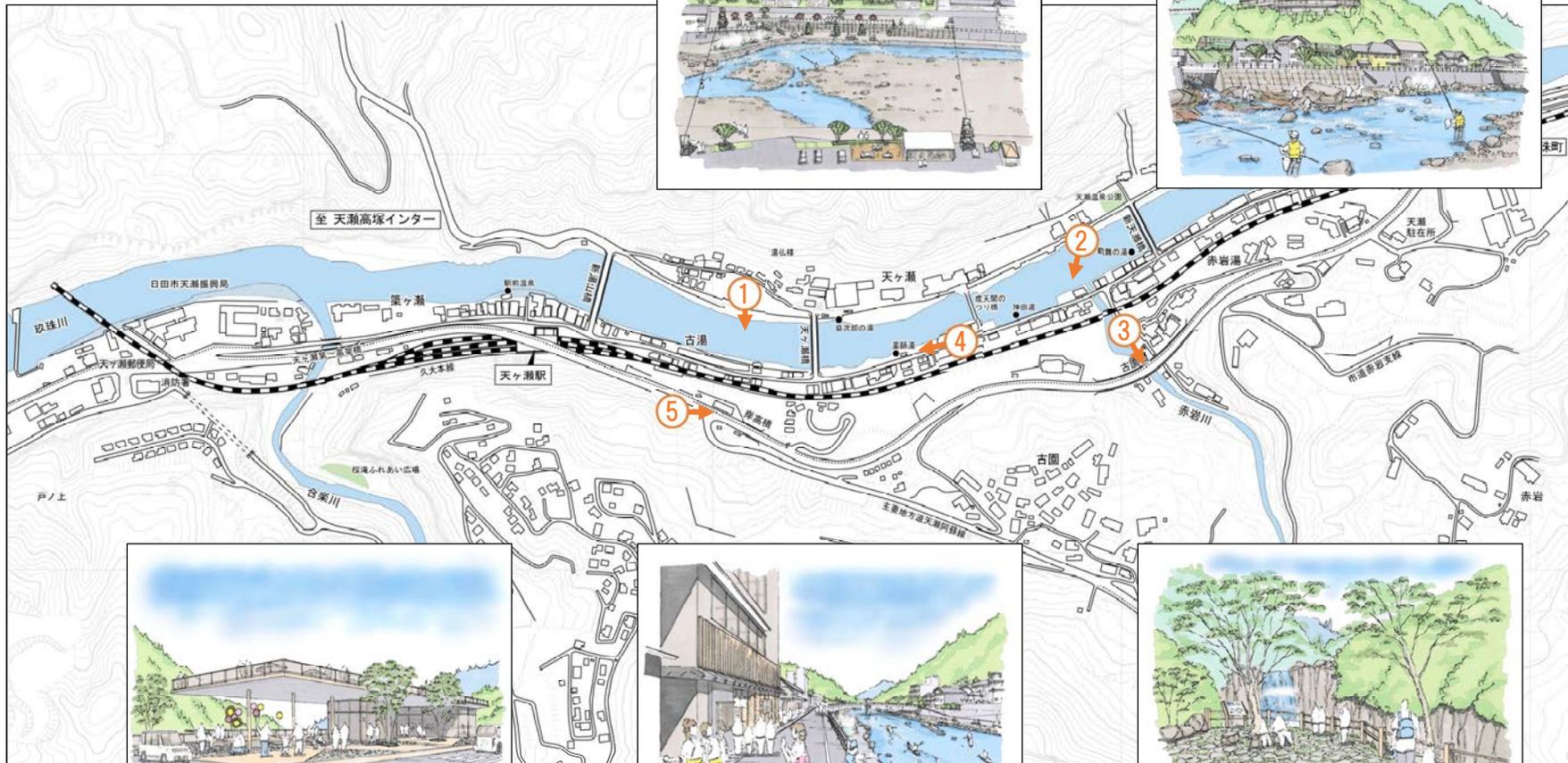
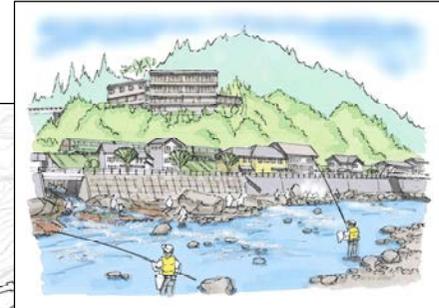


3.天ヶ瀬温泉街の将来イメージ

①自然と融合したまちなみ



②川辺の散策とアクティビティ



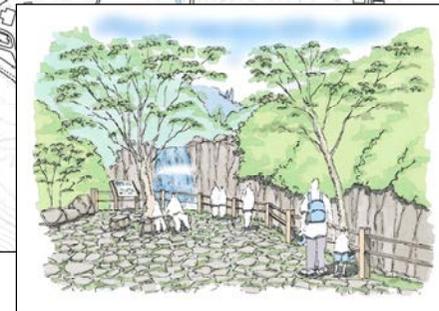
⑤温泉街を一望



④賑やかなまちなか



③歩いて行ける名瀑



①自然と融合したまちなみ



②川辺の散策とアクティビティ



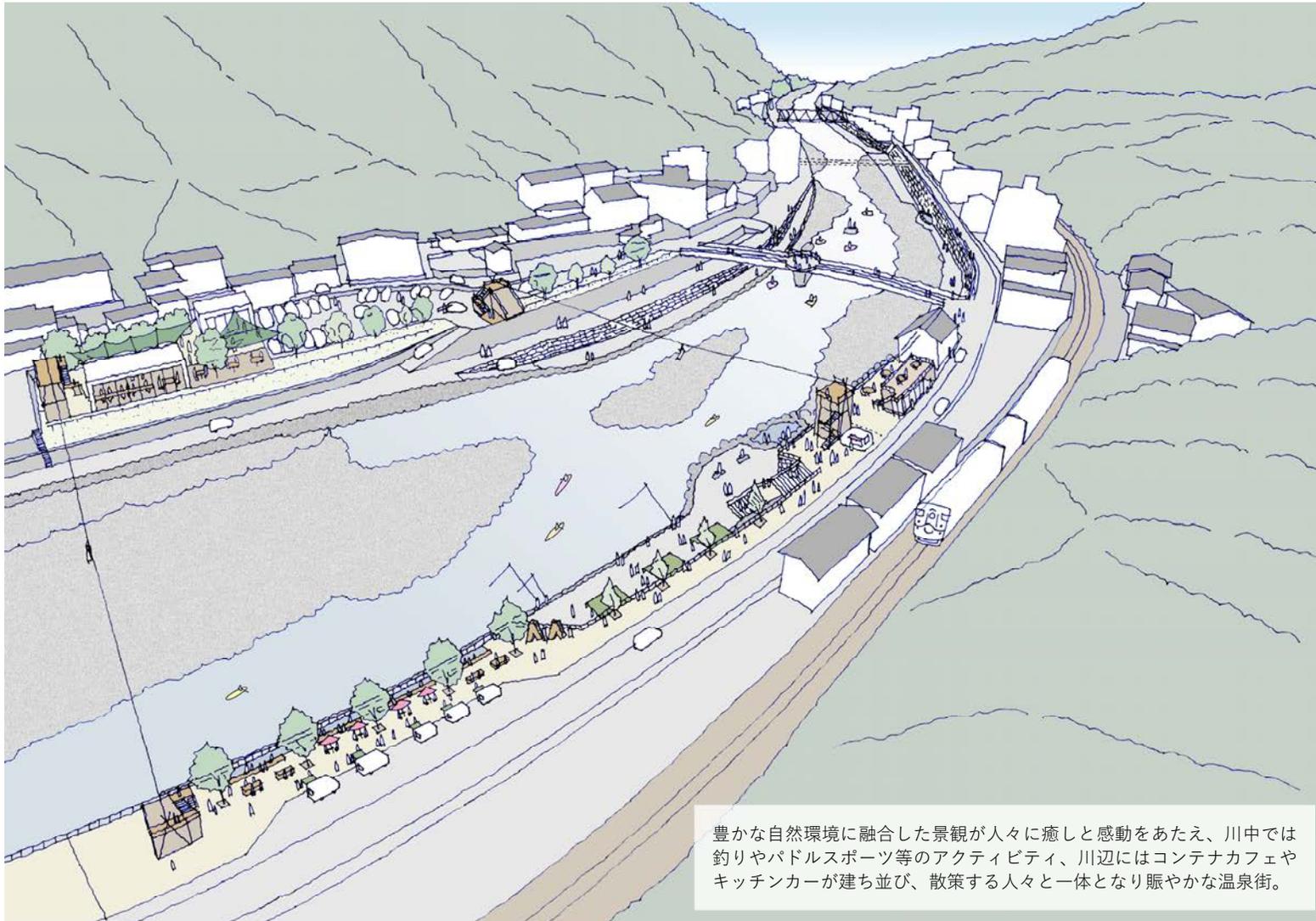
⑤温泉街を一望

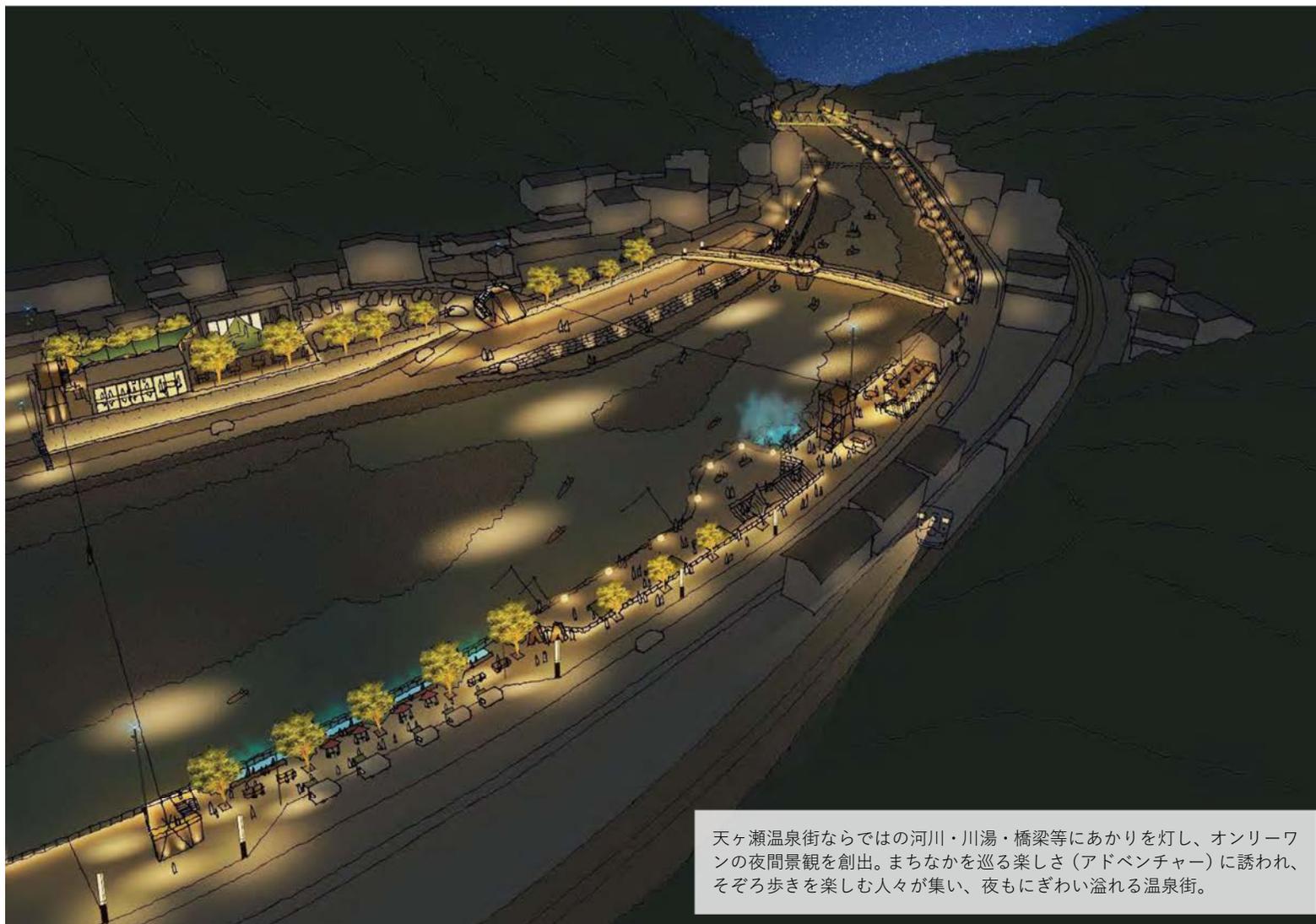


④賑やかなまちなか



③歩いて行ける名瀑





本章の目的

第1章にて天ヶ瀬温泉街の課題を4つの視点で整理しました。

- 「1.防災力の強化」
- 「2.持続的な地域経済」
- 「3.魅力的なまちづくり」
- 「4.エリアマネジメントの推進」

本章では、復興まちづくりの基本方針で整理した4つの柱をもとに、今後の天ヶ瀬温泉街復興まちづくり計画における「官民双方の取組」について、分野別に整理します。

- 【安全安心】 1. 地域防災力向上のための取組
2. 災害伝承に関する取組
- 【観光・商業振興】 3. 地域経済の活性化に資する取組
- 【公共デザイン】 4. 歩いて楽しいエリアに向けた公共空間の整備と利活用
5. エリアの景観形成に向けた取組
- 【夜間景観デザイン】 6. 安心・愛着・誘客に向けた夜間照明デザイン

本章に記載する「分野別取組」については、必要な諸条件を満たした上で事業化を目指すものが含まれており、確定している内容ではありません。

また、実現に向けて「予算措置・法的許可・住民合意」の3つが揃う必要があります。

1.地域防災力向上のための取組

現状の課題

- 全国規模で多発化・激甚化する自然災害は、従前の想定をはるかに超え、我々の身近な場所でいつでも発生しても不思議ではない時代となりました。
- 天ヶ瀬温泉街を流れる玖珠川は令和2年7月豪雨で氾濫し、その後も梅雨期の豪雨や台風の接近により氾濫危険水位までの上昇を繰り返しています。
- 自然災害に対する安全・安心な社会の構築は、ハード及びソフトの両面から可能な限り組み合わせ、充実、強化することが必要です。また、来るべき災害に備え現代社会を生きていくことは、我々一人ひとりの共通の課題でもあります。
- 今後は災害による犠牲者を出さず、天ヶ瀬温泉街の復興とともに、安全で安心な生活環境の保全に向けた官民連携による地域防災力の向上に取り組む必要があります。



「自らの命は自らで守る、地域で共に助け合う」 “持続的な意識”と“実践活動”が地域社会にとって重要

① 実効性のある自主防災組織と実践活動

地域防災を担う消防団や防災士、まちづくりを担う若者との連携を進め実効性のある自主防災組織の活動を推進します。

② 持続的な防災学習会（災害図上訓練）の開催

災害の振り返りを通じた記憶の定着、我が家の約束シートの作成、消防団、防災士、若者が協働した学習会（訓練）の開催を行います。

③ 避難訓練と自主防災組織による避難所運営

実働訓練に伴う課題の抽出と改善に向けた取り組み（参加者の減少、放送案内、訓練内容、避難所運営の改善等）を行います。

●持続的な防災学習に向けて（図上訓練）

令和4年度に地区(班)毎に開催された防災学習会で、つなぐ会議のメンバーや消防団が学習会の進行役を務めました。これらのノウハウの蓄積とともに、自主防災組織との連携を深めることで実効性のある避難行動に繋げ継続して取り組めます。



●避難訓練と住民が主体的となる避難所運営のあり方

過去に実施した訓練のアンケート結果を含め、訓練結果をアンケート等で評価することで課題の抽出を図ることが重要です。さらに避難所の課題解決に向け、行政だけでなく住民が主体的となり解決に向けた取組を進めます。



2.災害伝承に関する取組

災害伝承活動 -地域住民が支えあう災害に強い復興まちづくり-

玖珠川の河川改修は約10年の長期にわたる計画です。その間、まちを支える温泉観光や賑わいの復活とともに、自然との共生を図り“災害に強い復興まちづくり”を進める取組が必要です。

令和2年7月豪雨で被災状況と復興まちづくりや防災の取組を過去から未来へと継承する“災害伝承活動”を推進します。

① 災害伝承館と活動拠点の設置

令和2年7月豪雨の被災状況や温泉街の復興を望む地域住民の声（コトバの展示）、平時の防災活動とともに復興や賑わいを取り戻すための活動状況などを展示します。公共・既存施設等を活用し、復興の活動拠点や災害支援活動（ボランティア等）の拠点とします。

② 被災水位標を設置

令和2年7月豪雨を後世に伝える水位標を天ヶ瀬温泉街に設置します。地域住民に対する災害への教訓とともに、学習に訪れる多くの方へ災害伝承としての役割を果たします。

③ 災害からの教訓と復興への想いを語る人材育成

災害伝承を通じ、訪れる多くの方へ防災活動や復興への想いを語る事ができる人材を育成します。

●生きた防災教育・地域防災・復興を担う災害伝承活動

温泉街では外部団体（学校・地域）からの防災視察を受け入れています。また、地域の学校では防災教育を行っています。これらの活動を発展させ、地域と連携した持続的な活動とする仕組みを構築します。



●既存施設の活用

温泉街には多くの既存施設があり、災害伝承館として有効活用に取り組みます。他の自治体においても既存施設を活用した災害伝承館があります。



3.地域経済の活性化に資する取組

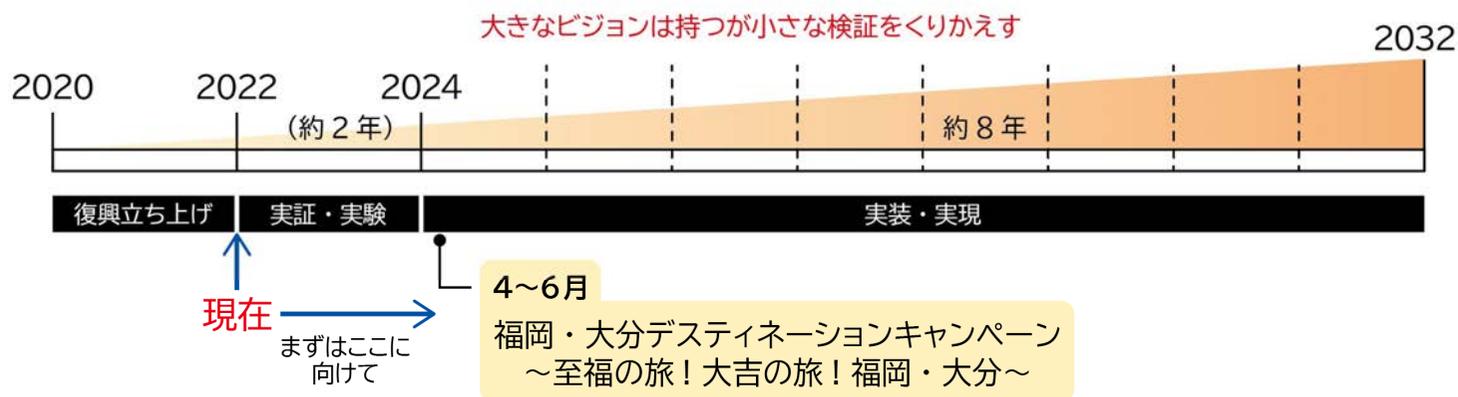
(1) 将来像に関する考え方

①新たな価値を見出す対話が重要

「温泉街」の看板を一旦外して考えることが、結果的に「温泉街」というエリアに新たな価値を見出すことにつながります。開湯 1300 年という長い歴史を持つ天ヶ瀬温泉、豊後三大温泉の一つとしての歴史にリスペクトしつつ、昭和～平成の温泉観光地文化を改めて見つめ直し、これから求められる「温泉街の新たな姿」を住民、事業者、行政等多様な立場の人々が対話しながら見出していくことが重要です。

②チャレンジと応援、それらの連鎖が重要

大きな資本に支えられた安定的な事業が理想ですが、約 10 年とされる復興事業の中では期待しすぎてはいけません。小さいながらも、エリアの新しい価値をつくりだすチャレンジな取組、事業をまち全体で応援し、小さな成功体験を生むことが重要です。長期的ビジョン（10 年）を見据えた上での短期的目標（1～3 年）を達成していく成功体験は周囲に伝播し、次のチャレンジを生み出すことになります。



(2) 稼げる地域を目指した行動（アクション）

支援は受けつつも、支援ありきではないまちを目指すことを常に意識していきます。以下の点を意識することで持続性のある取組を丁寧に組み立てていきます。

民主導であることを前提とする

- ▶復興をきっかけに新たなビジネスを起こし、最低限でも収益性のある持続的な取組を目指します。

売れるものを見つけよう

- ▶食や観光サービスだけではない、自然環境や歴史文化、災害の経験など価値あるものを活かし、収益化を目指します。

ローカルプレイヤーを輝かせる

- ▶応援の対象は「人」です。自分たちのチカラでやり抜く、という覚悟を持った人材を発掘や育成しながら地域に根ざした人材に光を当て応援していきます。

温泉観光地/温泉街の看板をいったん外そう

- ▶新たな「温泉街」を目指すために、その既成概念を一度外して、住む人・暮らす人の豊かさを改めて描きます。

(3) 地域経済の活性化に必要な取組

①エリアのポテンシャル調査の実施

エリア内において、商いの場として活用できる不動産の調査(場のポテンシャル調査)を実施します。主には、空き地、空き家・空き店舗等の活用可能性の分布調査を行いつつ、土地所有者へのヒアリングを通して、活用についての意向、立ち退き後の土地についての活用可能性などについて丁寧に把握していきます。

②リノベーションまちづくりの実践

既存の建築物に改修を加え、価値を高める「リノベーション」の発想を重視します。行政やまちづくり関係者、不動産オーナー、民間プレイヤーなどのステークホルダーと合意形成を図り、全員がそのプロセスの中で当事者意識を持つようにプロセスをデザインすることが重要となります。

③エリマネ組織等の連携体制の構築

天ヶ瀬温泉が有する良好な環境や地域の価値を維持・向上させるため、行政やまちづくり関係者、不動産オーナー、民間プレイヤーなどが主体となって、まちづくりや地域経営(エリマネジメント)を積極的に行うための組織立ち上げの検討を行います。

④プレイヤー探し

エリマネジメントには人材が不可欠です。現在、天ヶ瀬温泉街には主体的な動きが生まれつつあり、今後も人材の発掘、育成を続けることで、それらの体制の強化を図ります。エリア内はもちろん周辺地域を含め、個人、団体等にアプローチし、多様な立場の人材を巻き込み、段階的に輪を広げていくことが重要です。

⑤地域外との連携

自らの価値を客観的に見つめることも重要です。そのためにも、周辺地域との連携の方策を検討していきます。

(1)日田・玖珠・九重・小国など周辺エリアとの連携

周辺地域の取組についてリサーチします。ヒアリングにあたっては、地元団体等のもとに伺い、交流の機会を重ねます。このような積極的な連携はとても効果的で、相乗効果やネットワーク形成につながり、事業の広がりを生み出します。

(2)先進地域との連携

類似の取り組みや先進地とも繋がるのが重要です。いずれもただ見て回るだけではなく、関係者と対話する機会をつくり、地域住民や専門家がどのように関わっているのかなど、本質的な学びが得られるよう企画します。

⑥チャレンジと応援の連鎖を具現化する

「泊食分離」に向けた取組

地域活性化に向けた具体的な動きとして、飲食事業と宿泊事業との連携により、事業者を増やし、拡大させていく仕組み(流れ)を構築します。小さな規模での飲食事業のスタートをきっかけに、宿泊事業(旅館)と連携し、試行的な「泊食分離」プランを実施します。その効果を検証し、エリアにおいて共有していくことで、フィードバックしていくとともに、次の事業立ち上げにつなげていきます。連携が成功すれば、飲食店や参加旅館の増加や事業拡大につながり、「泊食分離」の取組が根付くとともに、多様な事業が生まれるきっかけとなります。

⑦アドベンチャーツーリズムの発想を取り入れる

「天ヶ瀬アドベンチャー」の発想＝地域資源を活かしたサステナブル(持続可能)な活動を結果的に地域経済の活性化へと結びつけることです。「アドベンチャー」に込めた意味である「ワクワクする高揚感」と同時に、地域の自然・社会環境のサステナビリティ(持続可能性)に配慮した新しい温泉観光のスタイルを目指します。

これからの観光地における地域経済の活性化は、観光客数の「量」の観光から、経済・社会的な観点でのサステナブルな効果を目指す「質」の観光へと変えていくことが重要となります。

そのためには、マスツーリズム(観光の大衆化)とは違った観点で構築された質の高い旅行プログラムを作り上げ、観光客、観光事業者、地域住民、環境の「四方よし」の温泉観光地として再構築することで、ブランドイメージや地域住民の雇用・所得向上により住み続けたい地域になるといったメリットも期待できます。

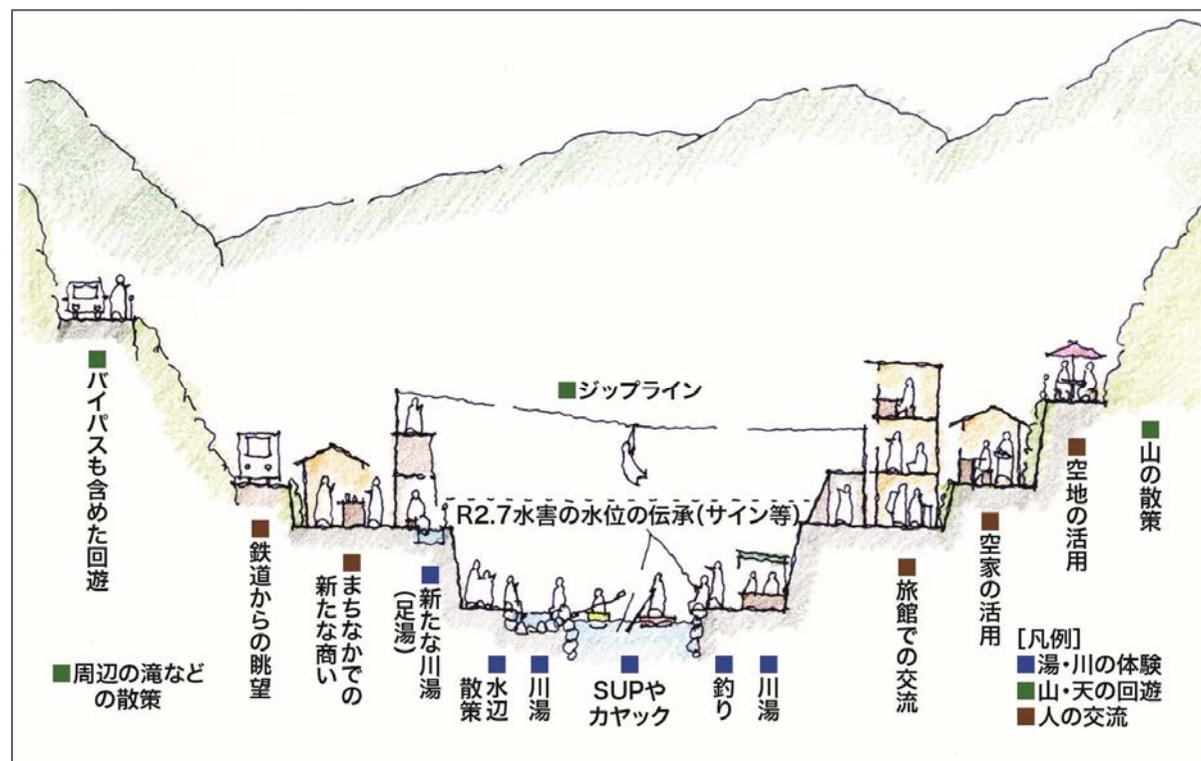
※アドベンチャーツーリズムとは「アクティビティ、自然、文化体験の3要素のうち、2つ以上で構成される旅行」とされています。
(日本アドベンチャーツーリズム協会による定義)。

4.歩いて楽しいエリアに向けた公共空間の整備と利活用

天ヶ瀬温泉街の特徴と公共空間の方向性

玖珠川の渓谷沿いにある天ヶ瀬温泉街は川とともに育まれた歴史・文化・川湯が特徴であり、兩岸を囲む深い山の緑によって箱庭のような町並みが形成されています。大きな被害が出た令和2年7月豪雨の記憶は様々な形で後世に伝承しながらも、これらの豊かな自然や文化を最大限に活かした温泉街の復興を目指していく必要があります。

魅力ある温泉観光地の創出に向け、様々な体験を楽しめ、「湯・川・山・天・人」を体感できる公共空間と利活用の連携を目指します。



天ヶ瀬温泉街の公共空間と利活用

天ヶ瀬温泉街の魅力を高めるため「水辺」「まちなか」「回遊」の3つで整理し、既存の公共空間や復興まちづくりにおける整備と利活用を連携させることで“歩いて楽しい温泉街”を目指します。

“歩いて楽しい温泉街”に向けた要点を以下のように整理します。

1.温泉街全体で玖珠川を活かす水辺動線と水辺拠点

天ヶ瀬温泉街を流れる玖珠川全体で水辺を歩ける動線を連続させ、動線沿いにいくつかの水辺拠点を設けることで利用しやすい河川を目指します。

2.まちなかと水辺をつなぎ回遊性を高めるアクセス動線

まちなかから水辺へと行き来できる安全な階段や坂路（スロープ）などのアクセス動線を設け、観光客や河川利用者による回遊性の向上を目指します。

3.河川利用を促す交通拠点と水辺拠点の連携

駐車場などの交通拠点と水辺拠点を坂路（スロープ）などのアクセス動線をつなぎ、SUP やカヤックといった道具の運搬を伴う活動に配慮した河川を目指します。

4.地元と観光客が共用できる川湯

女性や子どもでも気軽に使える足湯など、地元の利用者と観光客が共用できる川湯の利活用を目指します。

5.まち歩きを促す周辺環境との連携

桜滝や山伏滝といった温泉街の周辺にある自然環境やバイパス沿いの眺望を活かし、広がりのあるまち歩きができる環境を目指します。

第3章：復興まちづくりの分野別取組 … 4.歩いて楽しいエリアに向けた公共空間の整備と利活用

天ヶ瀬温泉街の公共空間と利活用の将来像

①新設駐車場の配置

交通動線と歩行者のまちなか動線との錯綜を避けるため、新湯山橋を経由した右岸側に新設駐車場の配置を検討します

②空き地などの利活用

箱庭的な天ヶ瀬温泉街の眺望を活かし、回遊性を高めるような、空き地の利活用を検討します

③益次郎の湯周辺の利活用

流れが穏やかな淵を活かした川のアドベンチャーを想定した水辺拠点と川湯の利活用を検討します

④新天瀬橋右岸下流の視点場

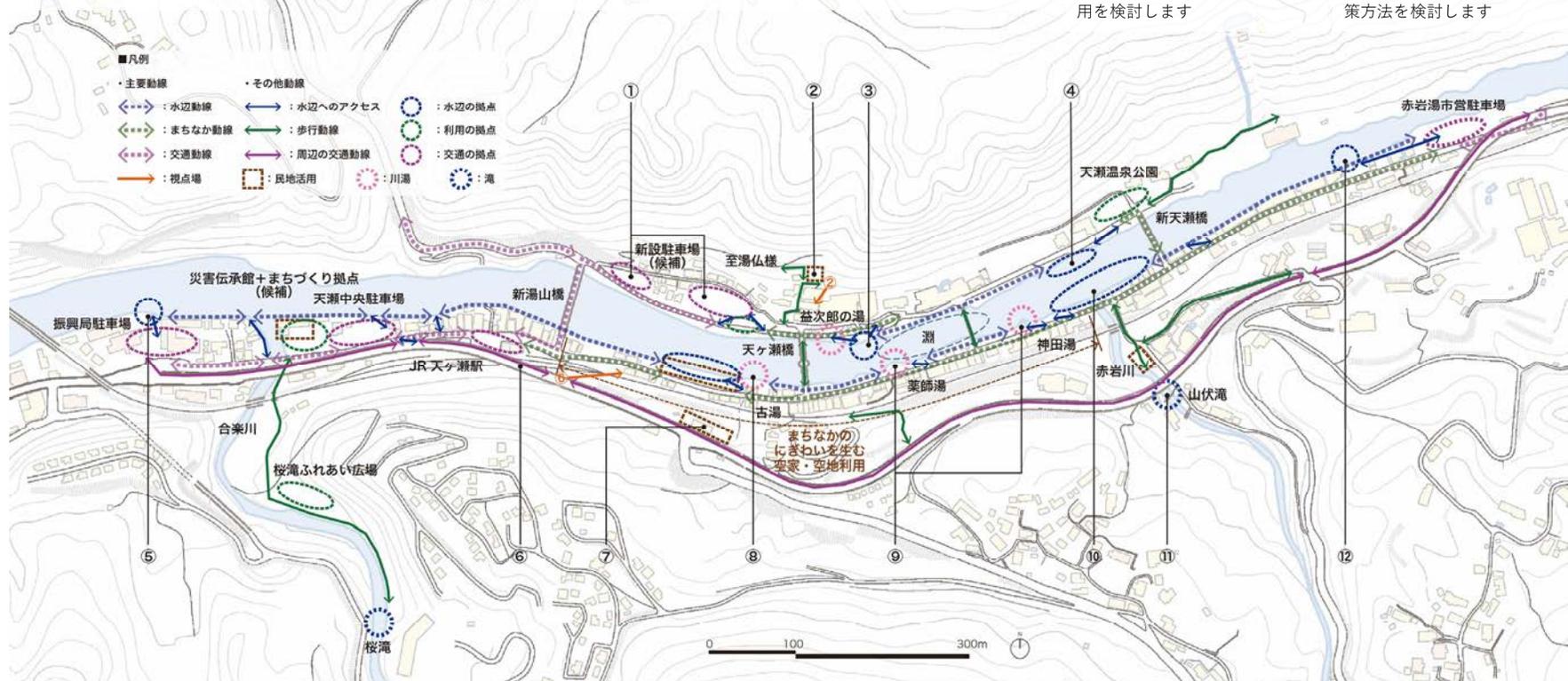
右岸から左岸(赤岩川)を望む視点場および新天瀬橋や天瀬温泉公園から水辺へ下りるアクセス動線を検討します

⑤振興局前の水辺利用

天ヶ瀬温泉街全体を使った川のアドベンチャーなどの終着地点として、振興局駐車場と一体となった水辺拠点としての利活用を検討します

⑥バイパスとの回遊性

天ヶ瀬温泉街が一望できるバイパス沿いも含めた回遊動線を検討します。また、歩くだけでなく、他のモビリティを用いた散策方法を検討します



⑦空店舗の利活用

天ヶ瀬温泉街が一望できる視点場として、飲食や店舗スペース・展示所として空店舗の利活用を検討します

⑧古湯周辺の利活用

天ヶ瀬橋とあわせ温泉街を眺める視点場とまちなか動線の役割を担い、アドベンチャー拠点としての利活用を検討します

⑨薬師湯・神田湯周辺の利活用

天ヶ瀬温泉街を象徴する川湯のある風景を活かしながら、観光客の水辺利用と地元の川湯利用との共存を図っていきます

⑩赤岩川との合流点の水辺利用

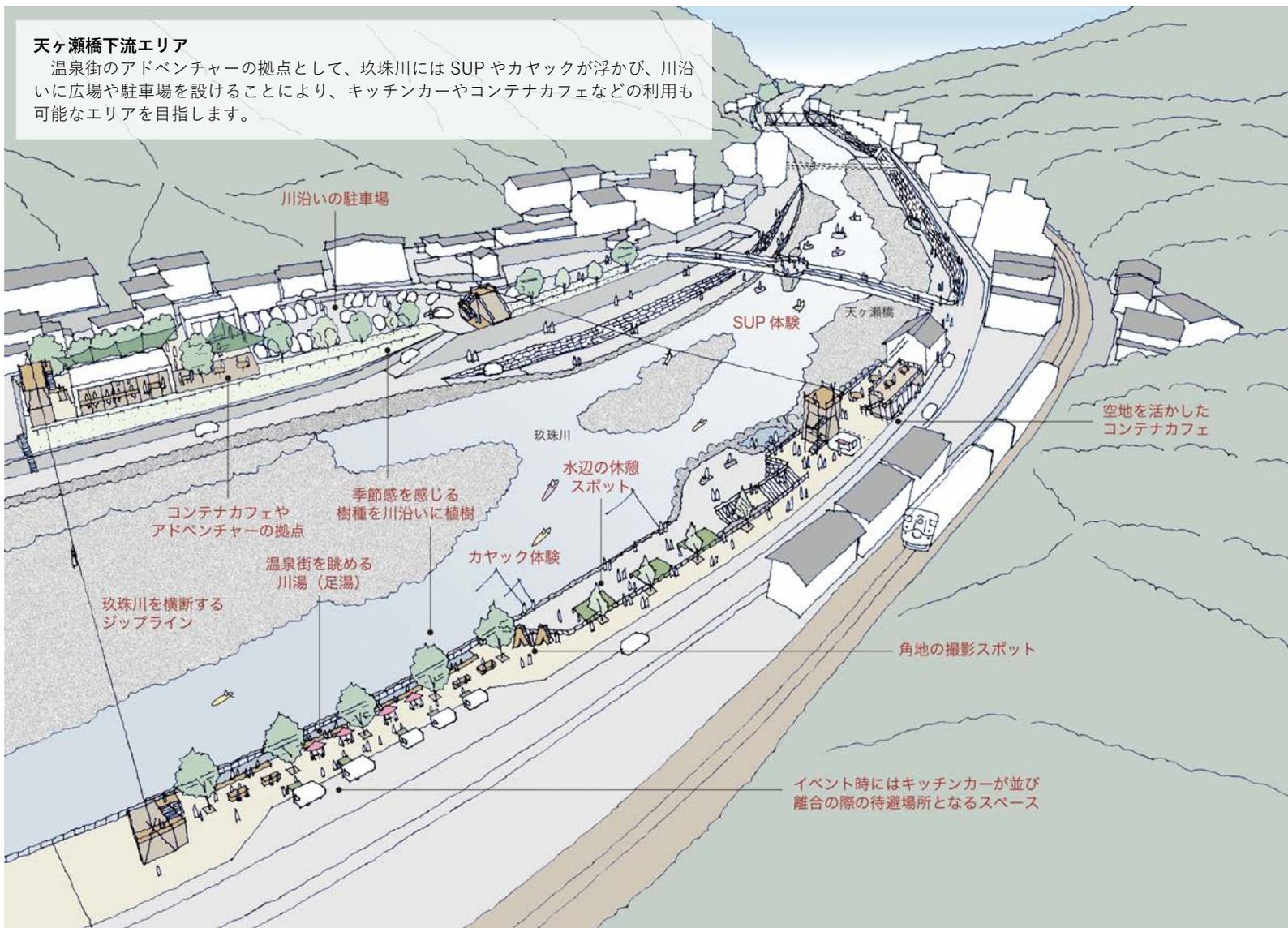
天ヶ瀬温泉街の泉源が地下を流れる岩河床を保全し、特徴的な岩肌を間近に見る水辺拠点としての利活用を検討します

⑪山伏滝周辺の利活用

まちなか動線からの立地を活かし、あまり知られていない山伏滝の魅力を活かすため、滝までのアクセス動線を検討します

⑫赤岩湯駐車場周辺の水辺利用

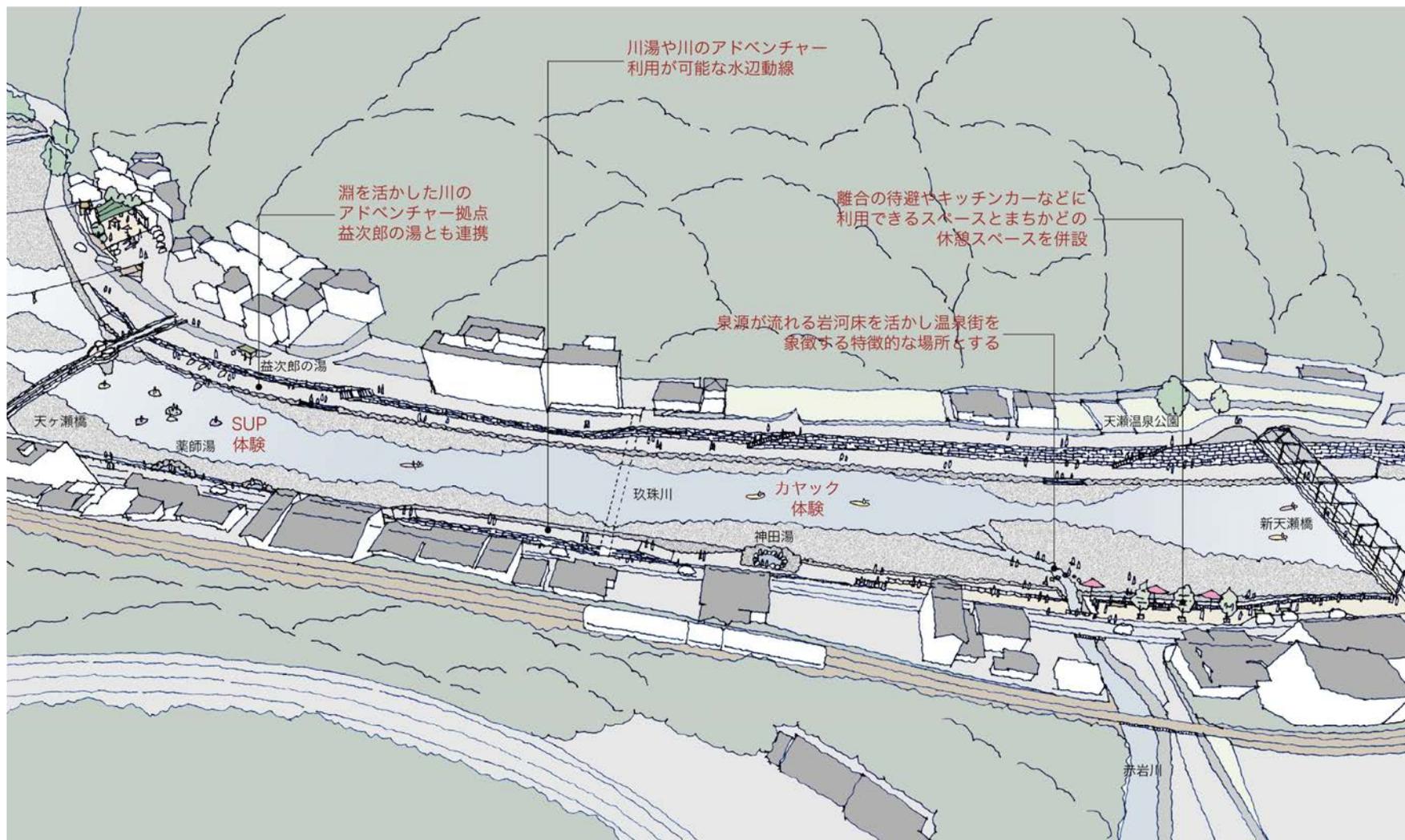
天ヶ瀬温泉街全体を使った川のアドベンチャーなどの出発地点として、駐車場と一体となった水辺拠点として検討します。また、利便性を向上させるため、車両が水辺にアクセスできるスロープの設置を検討します



第3章：復興まちづくりの分野別取組 … 4.歩いて楽しいエリアに向けた公共空間の整備と利活用

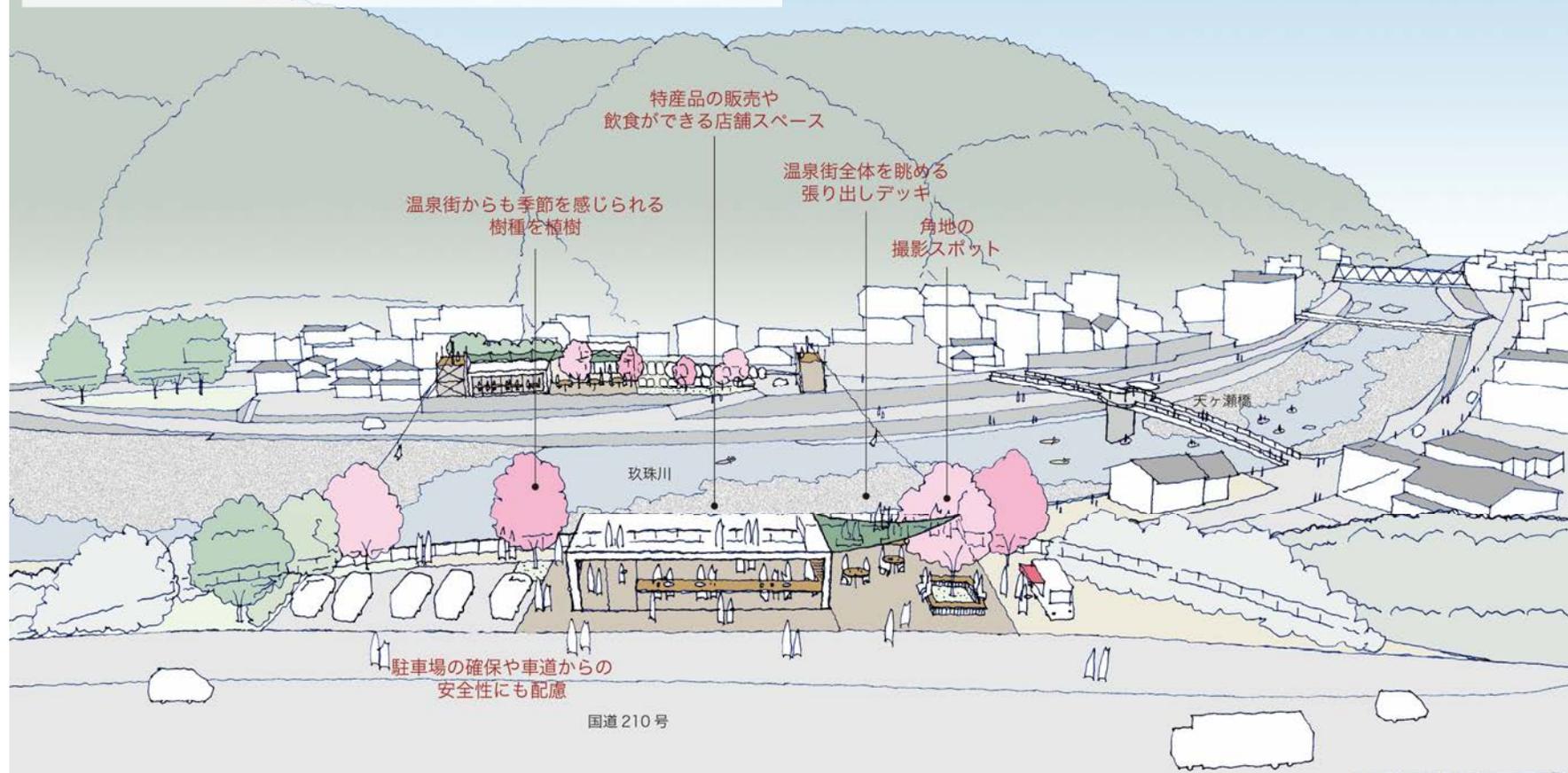
天ヶ瀬橋～新天瀬橋エリア

既存の川湯を利用する地域住民と新たな川のアドベンチャーを利用する観光客とが共存できるエリアを目指します。天ヶ瀬橋上流では淵を活かした河川利用を想定し、赤岩川との合流点では泉源が流れる岩河床を活かし温泉街を象徴するエリアを目指します。



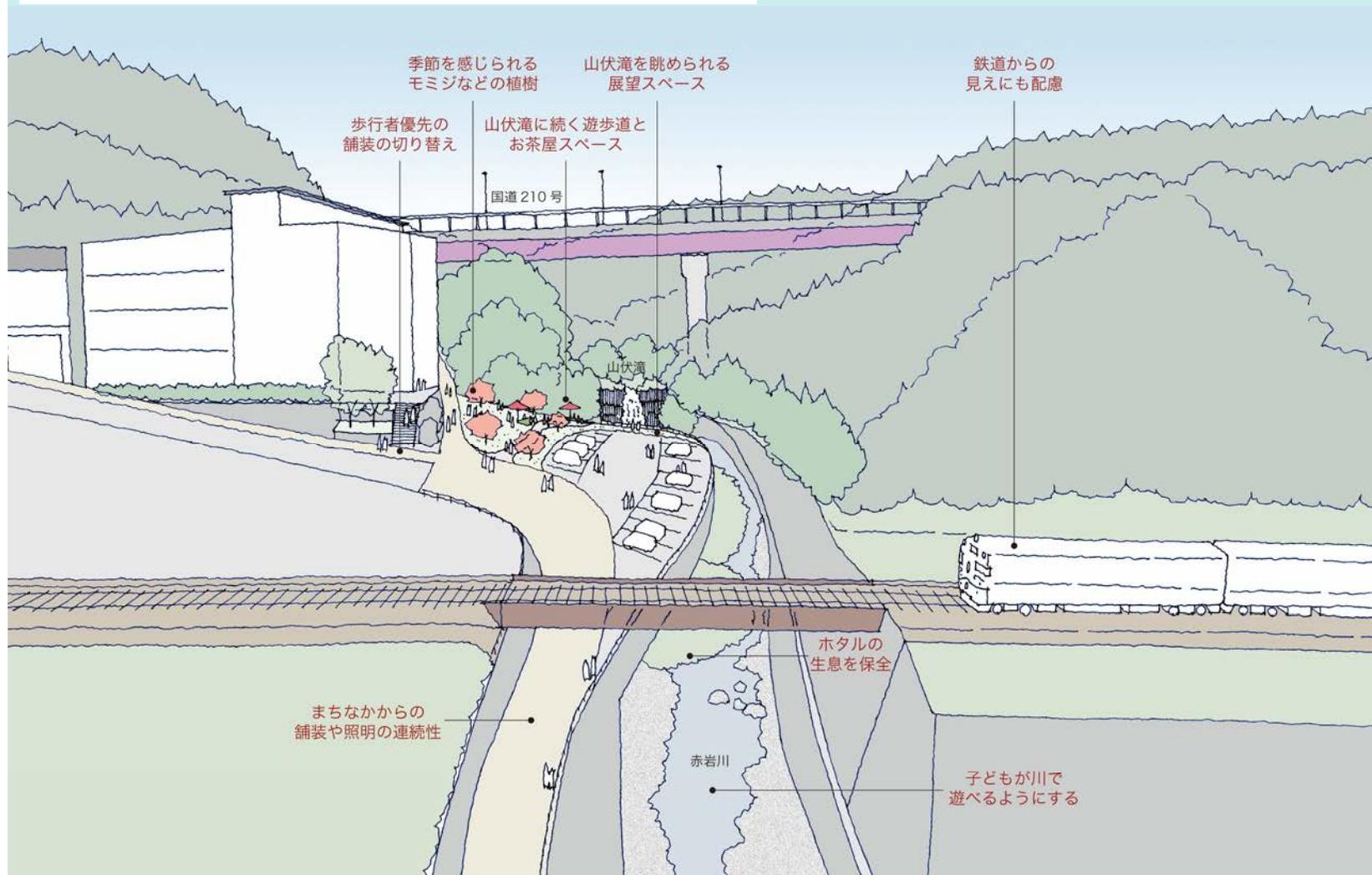
空店舗の利活用

国道 210 号に面した交通アクセスの良い空地を活用して、温泉街を一望できる展望デッキや撮影スポットとなる仕掛け等により誘客を促すとともに、併設した店舗スペースにおいて、特産品の販売、飲食の提供等ができる場所を目指します。



山伏滝周辺の利活用

滝の魅力をより一層感じられるように、視界をさえぎる樹木の伐採など修景に努めるとともに、滝の近くまで行ける遊歩道や休憩所等による新たな観光スポットを目指します。



5.エリアの景観形成に向けた取組

エリアの価値向上に向けた景観形成ガイドラインが必要

今後の復興まちづくりにおいて天ヶ瀬温泉街の「エリアとしての魅力」を高めていくためには、河川改修等によって整備される「公共空間の質の確保」とあわせて、旅館、店舗、住宅等の「民間による景観形成」を積極的に進めていくことが有効です。

個々の民間事業者による建築行為や開発行為と日田市や大分県による公共事業が、10年単位で積み上げられた後に、エリアとしての魅力を持った天ヶ瀬温泉街が実現するためには、天ヶ瀬温泉街が今後取り組む景観形成の方針やその実現に向けて守るべき作法を、地域住民、地域外からの参入者、日田市、大分県等の関係者で共有するための「天ヶ瀬温泉街景観形成ガイドライン（仮称）」と、これを運用していくための体制、仕組みの構築が必要です。これらガイドライン策定とその運用体制構築については、できるだけ早期に実施することが事業効果を高める観点から望ましいです。

●景観形成ガイドライン策定にあたっての留意点

「天ヶ瀬温泉街景観形成ガイドライン（仮称）」は、これまで天ヶ瀬温泉街の地域住民が守ってきた魅力ある景観を後世に伝えていくとともに、これからの時代のニーズに応えうる魅力的な景観を形成していくことを目的としており、一般的な景観ガイドラインで対象とされる「建築物」だけにとどまらず、「外構的な空間（駐車場、アプローチ部分等）」、「屋外広告物」、「夜間照明」、「道路等の公共施設やその付属物」等、エリアの魅力形成に寄与するものについて幅広く方向性を示すこととします。

●運用の体制、仕組みの構築にあたっての留意点

ガイドラインの運用については、①地域住民等の関係者が一丸となって取り組む体制と、②地域外からの参入者等と早い段階から協議ができるような仕組み、③これらの協議プロセスを専門家が支援する体制を構築することが重要です。

6.安心・愛着・誘客に向けた夜間照明デザイン

6-1 観光まちづくりにおける夜間景観とは

旅行形態の変化によって個人旅行が主流となり、国内の多くの観光地は大きな転換点に来ており新たな挑戦が始まっています。一軒の旅館で旅のすべてを賄うスタイルから、旅先のまちの風景やその空間体験・ローカルな食など、観光地としての総合力が問われる時代が来ており、中でも**そぞろ歩きを誘発するような風景・美しい夜間景観**は、目的地の選択において大きな意味を持ちます。

水害により多くを失った天ヶ瀬温泉ですが、復興を大きなチャンスととらえ、今日の旅行ニーズにこたえられる「**まちの夜景魅力**」を磨き上げ、**選ばれる温泉地を目指す**と同時に、**住まう誇りや、住みたくなる魅力**を併せ持つ新たなまちとしての環境を整えることを目指します。

●公民連携で実現する未来

今日の照明計画は、ただ明るさを確保するだけではなく、快適性や「まちの個性」を創出し、地域の魅力を再認識させる効果があります。LED の登場によって公共照明も水銀灯だけの計画から脱却し多様な間接照明やライトアップを取り入れることが可能です。緑や水辺、橋梁などの土木構造物なども活かした天ヶ瀬温泉ならではの風景を目指します。

また美しい夜間景観の実現には、民間のあかりも重要です。公共のあかりの整備と同時に、民間のあかりの目標となるガイドラインを設定して、公民連携によるトータルな「まちのあかり」のマネジメントが望まれます。

●照明効果による防災力の向上×観光

照明制御とIoTの組み合わせによって、夜間の河川・橋梁の視認性を高め、危険情報を視覚的に伝達することが可能です。Webカメラ・カラーLED照明などを活用し水害経験地域ならではの強い防災力を獲得すると同時に、それらの照明効果が平時には夜間景観の構成要素として活かされることが望まれます。

ネット社会が到来し 観光地には絵になる1枚が必要



草津温泉（群馬・18年連続1位）

夜間景観実施計画

まちのあかりのガイドライン



神戸市



協議会（神戸市南京町）

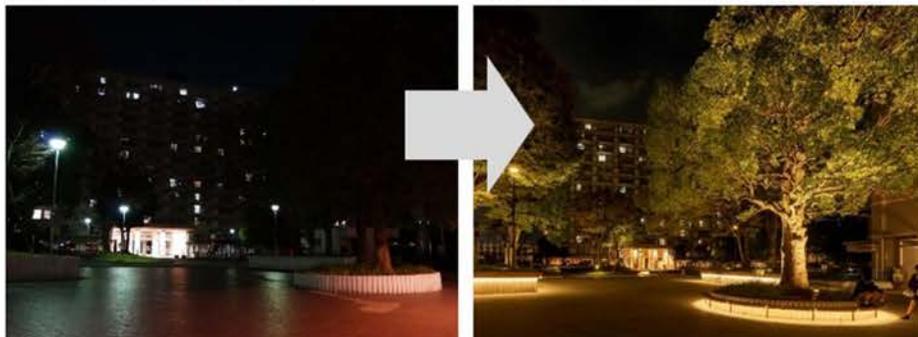


防災アラートシステムの橋梁（熊本県人吉市）

6-1 観光まちづくりにおける夜間景観とは

●めざすべき夜間景観とその効果

① 不安な場所から → 安全安心な場所へ



昭和時代の公共空間では樹木の演出は不可能でした。LEDの普及により、公共空間でも、樹木のあかりで「安心感を手に入れる」ことができます。

② 闇に沈んでいる河川→水辺の魅力が活かされた環境



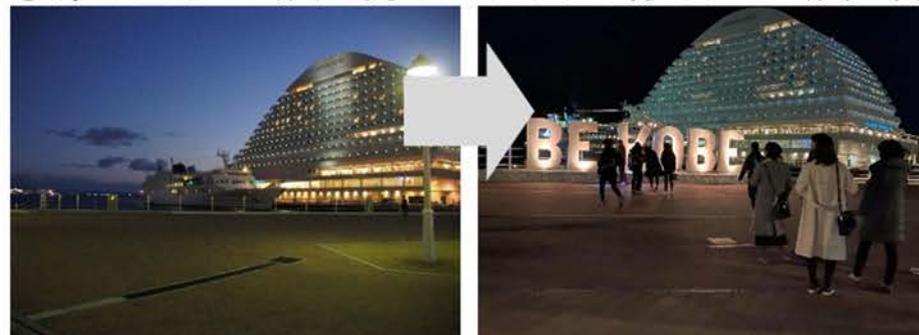
以前は水銀灯のみであった公共照明も各地でアップデートされています。地域の自然景観や既存の土木デザインを「磨き・魅せる」のが照明デザインです。

③ 見えないランドマーク→ 誇れるランドマーク



橋梁や小壁などは、あかりを追加するだけで SNS 映えするランドマークに変えることができます。またシンボリックな建築はライトアップにより価値が際立ちます。

④ 誰もいない公共空間→ みんなが行きたい公共空間



モニュメントやシンボルツリーによって、視線を誘導したり、記念撮影を誘発するなど、滞留空間の価値を高めることが可能です。

6-2.魅力ある夜景づくりに向けた照明デザイン

◆現状の課題

- 度重なる水害により、まちのあかりそのものが激減し、不安な暗がり広がっています。
- 水害等により河川域の照明設備等が破損劣化し、夜間の魅力が失われています。
- 観光地景観としての夜間景観への取組がされておらず、誘客に必須である夜間景観形成ができていません。それにより宿泊観光地に必要な「夕刻のそぞろ歩き」などの回遊性が損なわれており、地域のコンテンツ形成と一体的な観光まちづくりへの取組が必要です。
- 都市間競争の中で日田市における主要な宿泊観光地である天ヶ瀬温泉の観光地魅力の更新は必須であり、劣化を水害以前に戻すのではなく「強い観光地」として育てる視点が重要です。



温泉観光地として魅力的な夜間景観形成が必要

“絵になる風景の創出”“安全・安心の確保”を軸に地域魅力の再構築を目指す

① 玖珠川を中心とした天ヶ瀬温泉 ならではの夜間景観を創出

- ・ 河川改修と連携した照明設備
- ・ 橋梁、川湯、滝等のランドマーク化
- ・ 天ヶ瀬温泉の「決め手の夜景」創出
- ・ 自然を活かしたあかりアドベンチャー

② 暗がり無くし、歩ける河川 域・まちなかを形成

- ・ 道路、公園照明のアップデート
- ・ 河川遊歩道の明るさ確保
- ・ アクティビティを支えるあかり
- ・ 地域による夜間景観ガイドラインの整備

③ 防災×観光 環境に配慮した照明計画

- ・ エリア全域での照明制御による省エネルギーと照明演出の両立
- ・ 出水期にも強い機材の工夫と防災照明の平時利用
- ・ 動植物に配慮した点灯プログラム保守、更新計画の検討

6-2 魅力ある夜景づくりに向けた照明デザイン

◆天ヶ瀬温泉街の夜間景観の将来像

天ヶ瀬温泉街の魅力を高めるための将来像を「水辺」「まちなか」「周辺拠点」の3つで整理し、既存の公共空間照明更新と復興まちづくりにおける照明整備を連携させます。また、それぞれの領域において、夜間景観のコンセプトである「川を魅せる」「安全安心」「回遊性向上」を環境配慮のもと具現化し、新たなアイデアを取り入れ“天ヶ瀬アドベンチャー”を夜間にも体感できる温泉街を目指します。

・他の温泉地では体験できないオンリーワンの水辺景観の創出

より選ばれる温泉街となるための復興河川ならではの圧倒的な夜景の創出。護岸や橋梁のみならずバイパスからの遠景にも配慮した絶景を目指します。

・回遊性を高めるエリア設定とランドマーク演出

橋梁・滝・川湯（足湯）・建築・樹木・モニュメントなどを活用し、歩いて楽しく誇れる温泉街を目指します。ネーミングのできるゾーンの創出を目指します。

・交通拠点と水辺拠点を活かし支える照明計画と利活用に必要な電気設備の整備

安全安心な駐車場、行きたくなる広場など住民にも来街者にも心地よい明るさのある環境を目指します。

・水辺遊歩道、まちなか道路、周辺園路など主要な歩行空間に暗がりをつくらない

既存公共照明のLED化も含めた、歩行空間照明の更新とそれらの制御による深夜の省エネを検討。住民にも来街者にも快適で安全安心な日常を目指します。

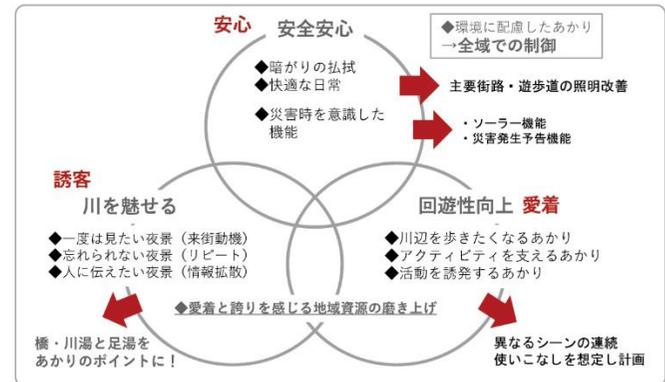
・防災力を高めるあかりを夜景資源としても活かす

景観照明を可変色LEDで整備し、増水時には制御技術により水位視認の防災サインとして活かすことを検討します。

・天ヶ瀬アドベンチャーを支えるあかりの利活用検討

エリアマネジメントによる観光まちづくりのコンテンツとして、天ヶ瀬の自然環境を活かした新たな夜間アクティビティや閑散期対策イベントなどを想定した拡張性のある照明計画を検討します。

「天ヶ瀬温泉街復興まちづくり」夜間景観基本方針（案）



復旧する橋梁をフォトジェニックに整備

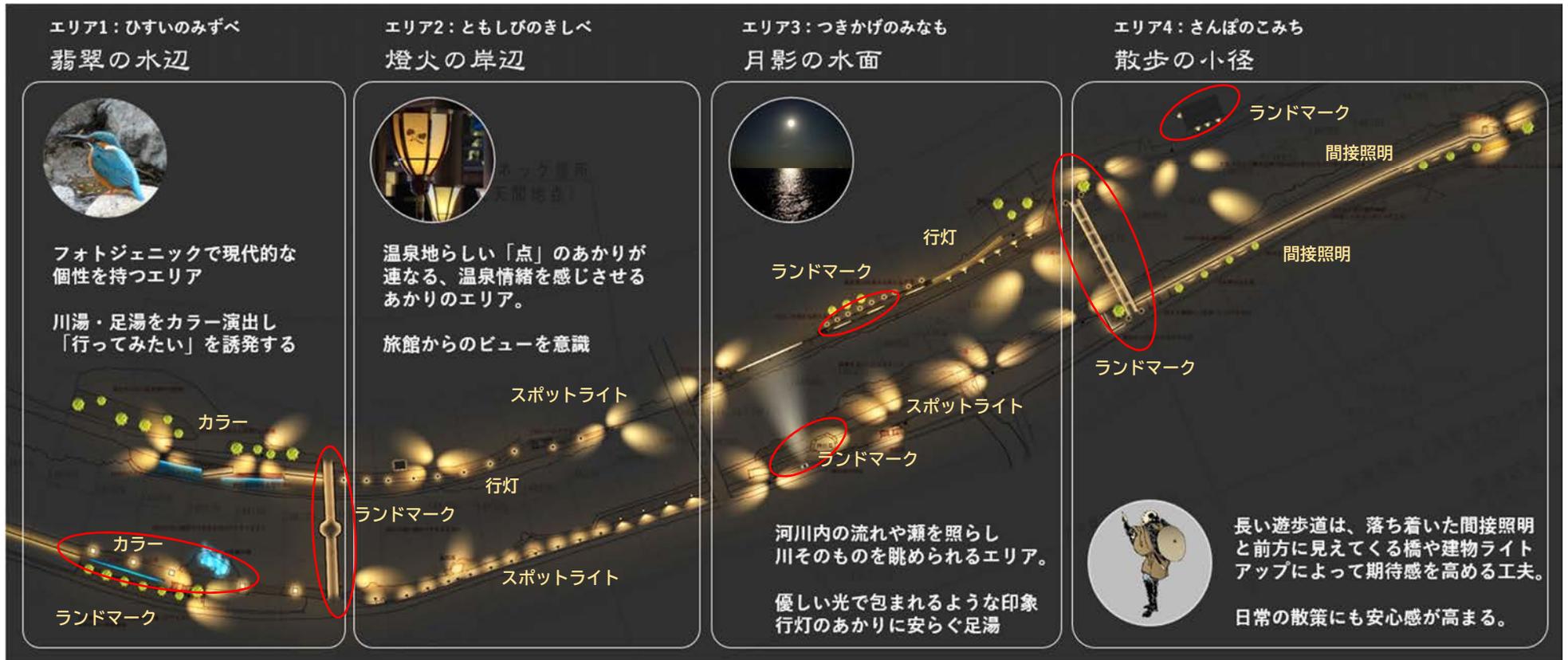


既存の樹木を活かした水辺景観演出

6-2 魅力ある夜景づくりに向けた照明デザイン

● 玖珠川を中心とした天ヶ瀬温泉ならではの夜間景観を創出【水辺】

あかりの将来像を念頭に、水辺全域を総合的に検討。全体を4つのエリアに分け、巡る楽しさ（アドベンチャー）のあるオンリーワンの温泉街夜景を目指します。



● 明珠川を中心とした天ヶ瀬温泉ならではの夜間景観を創出【水辺】

◆ 水辺の整備イメージ（案）① “翡翠の水辺”

大規模な護岸・公共空間整備は、カラー演出なども使用し温泉街の顔となるフォトジェニックな個性を持つ河川夜景を目指します。



● 玖珠川を中心とした天ヶ瀬温泉ならではの夜間景観を創出【水辺】

◆ 水辺の整備イメージ（案）② “燈火の岸辺”

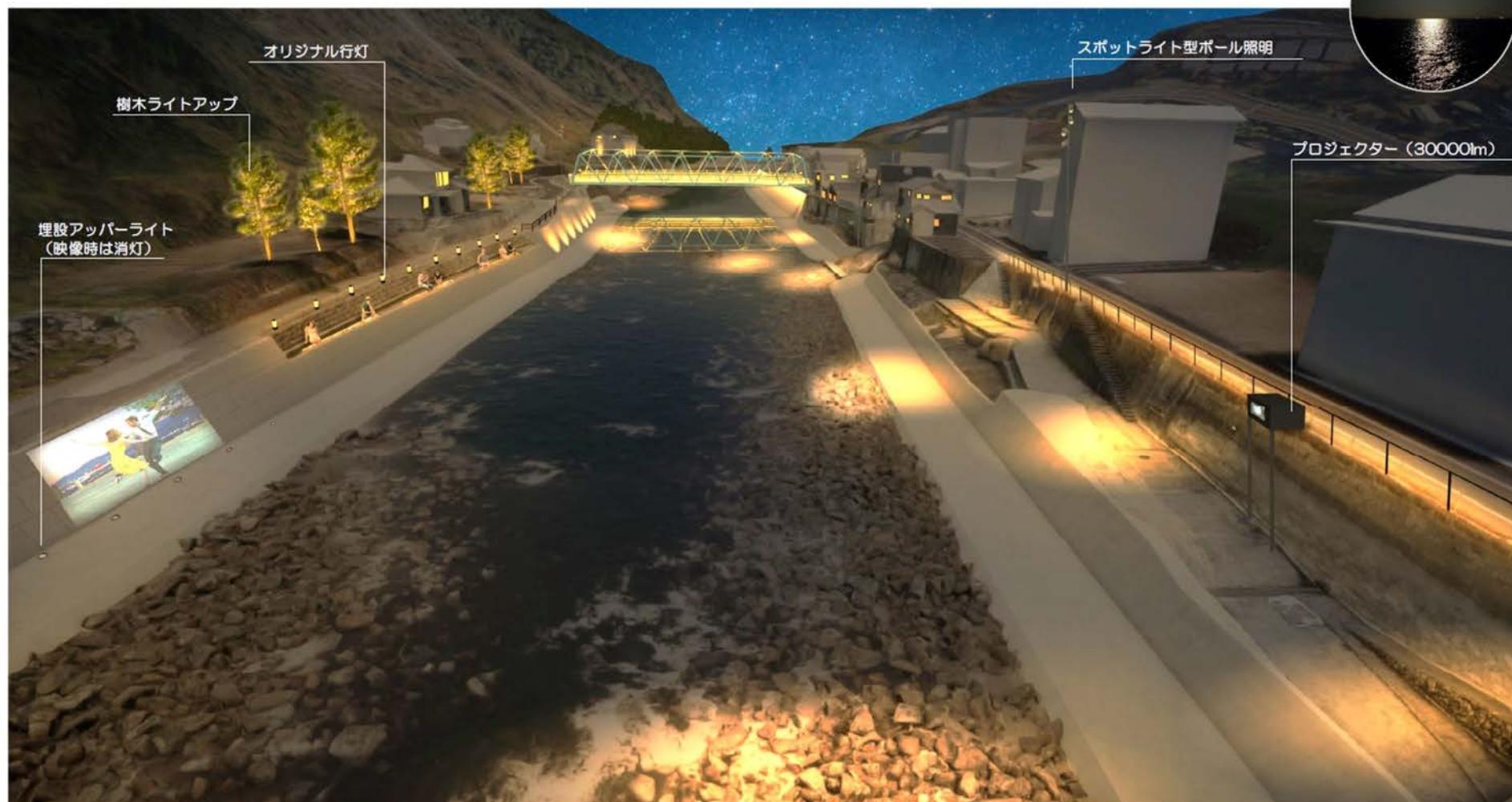
旅館の連なるエリアでは、電球色での統一と「点」のあかりが連なる温泉情緒を感じさせる「和のあかり」で構成し、安全安心な遊歩道空間の実現と旅館からのビューを兼ね備えた灯りを目指します。



● 明珠川を中心とした天ヶ瀬温泉ならではの夜間景観を創出【水辺】

◆ 水辺の整備イメージ（案）③ “月影の水面”

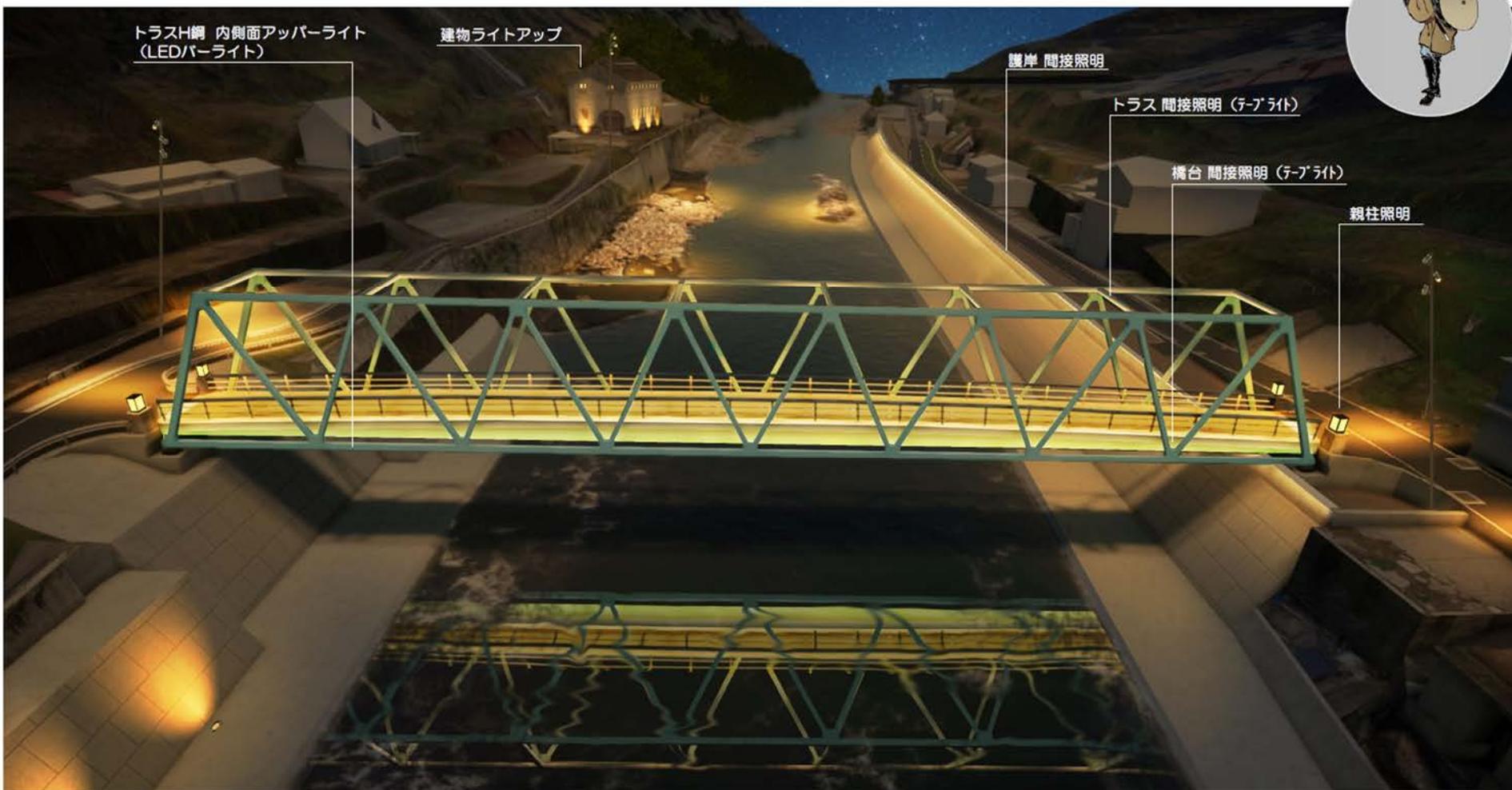
河川内の流れや瀬を照らし両岸から眺める対象として河川を整備するエリア。優しい光で包まれるような印象と「五感で感じる」がテーマのエリアを目指します。



● 玖珠川を中心とした天ヶ瀬温泉ならではの夜間景観を創出【水辺】

◆ 水辺の整備イメージ（案）④ “散歩の小径”

再建される「新天瀬橋」と護岸の土木魅力が圧巻のゾーン。他のまちにない新たな河川夜景をデザインし、暮らしにも快適な観光地イメージの獲得を目指します。



6-2 魅力ある夜景づくりに向けた照明デザイン

●暗がり無くし、歩ける河川域・まちなかを形成【まちなか】

あかりの将来像を念頭に、歩行空間の明るさ確保と周辺ランドマーク演出を総合的に検討し、深夜の省エネを念頭にした整備を目指します。

●暗がりを無くし、歩ける河川域・まちなかを形成【まちなか】

・アクティビティを支えるまちなか公共空間の照明整備

- ・夜間にも利用できるイベントエリア
- ・ジップライン支柱などのアクティビティ拠点をランドマーク化 等



・まちなかにぎわい施設の照明整備

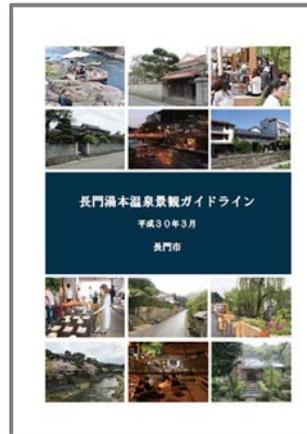
- ・窓からの漏れ光を活かす
- ・立ち寄りたくなる、行ってみたくなる外観イメージの創出 等



●暗がりを無くし、歩ける河川域・まちなかを形成【まちなか】

・民間のあかりはガイドラインを作成・活用し景観形成をはかる

- ・色温度の統一
- ・おそろいの提灯や行灯の使用 等



3 景観形成に向けた項目別ガイドライン (2) 夜間景観編

(2) 夜間景観編：あかりの工夫・ノウハウ集

素敵な夜間景観は、公共・店舗や旅館・住宅のすべてが作り出す風景です。以下に簡単なあかりづくりのコツをまとめてみました。ぜひ、みんなで取り組みましょう。選び方の基本は「LED」「電球色」です。

【樹木や花壇の演出】
基本的に、真下から上に向かって照らします。幹にできるだけ近い場所に設置します。

樹形によって照らし方にコツがあります。大きく枝が広がった樹形では複数のスポットライトで照らすのが良いでしょう。斜めに照射した場合に、葉がにじみ込まないよう注意しましょう。

スライク式のスポットライトを使えば、自由に地面に射せるので、樹木を見ながら調整できます。みんなで取り組みましょう。

住宅や店舗・旅館のファサード（建築物の正面部分）であれば、LED10～15%程度、500～1000lm（ルーメン・明るさを表す単位）程度が目安です。高照の配光角度を選ぶ場合は、樹木なら「広角・40°」程度が目安です。

【旅館らしきをつくるコツ】

コントラストアップロープを印象的にするために、行灯が有効です。

玄関前に樹木がある場合は、ライトアップしましょう。

スポットライトは、樹木の真下から真上に照射し、葉などに当たらないよう注意しましょう。

行灯の置き方
道路に沿って同じ間隔に置くことで、交互に（手島配置）置くことで、和風らしさを演出できます。スポットライトで道を照らす方法もあります。

横に長いファサード（建築物の正面部分）の場合は、行灯などを連打するのも効果的です。

玄関まわりの印象も重要です。樹木がなくても、壁や柱などの印象を強調し、和風（縁の面）の雰囲気づくりをしましょう。

壁などのライトアップにも、スライクのものも有効です。

番号の看板などはできるだけ内照式（内側に光源がある発光するもの）を選び、木製の看板などにして、和風から照らしましょう。

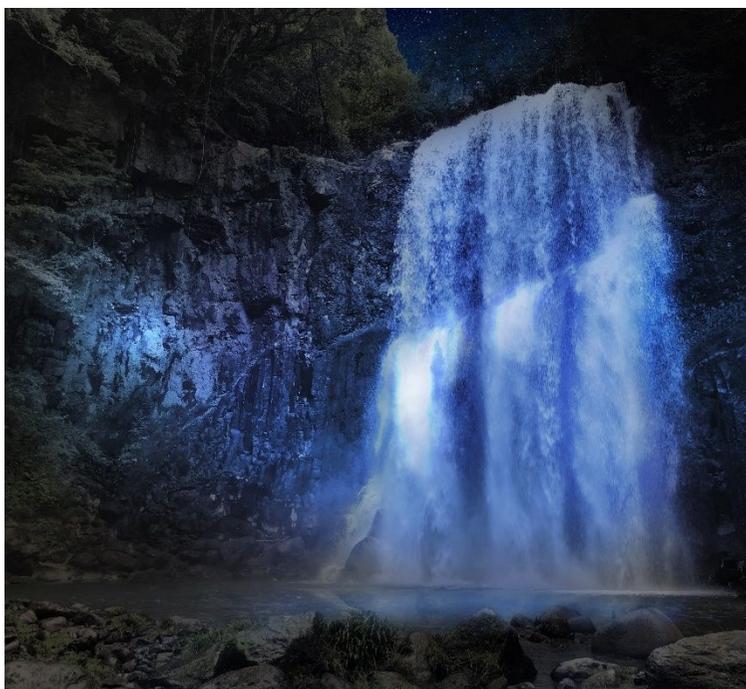
25

夜間景観ガイドラインの例（長門湯本温泉）

●暗がりを無くし、歩ける河川域・まちなかを形成【まちなか】

・『桜滝』『山伏滝』とそれらへ続く街路など、周辺ランドマークへの夜間景観整備

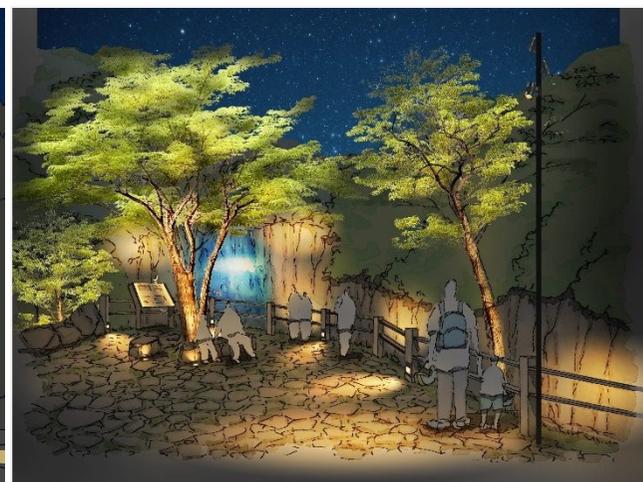
夕刻から夜間にかけてのそぞろ歩きなど温泉街の回遊性を高める効果のある周辺エリアは、そのアプローチ空間も含め夜間景観整備を検討します。合わせて、公共性の高い建築、工作物など河川域以外のランドマークの発掘にも注力します。



桜滝



山伏滝



6-3.防災アラート照明の活用による防災力向上

◆現状の課題

- 日常的に河川内は遊歩道も含め暗く、増水時の河川水位や橋脚の水位高は夜間には視認しづらい状況です。
- 降雨・暴風時は避難放送も聞き取りにくく視覚的な防災手段が現在はありません。



河川内は橋脚も含め暗く水位は見えない



球磨川が増水し危険が高まっていることを知らせるため、赤くライトアップされた水の手橋＝19日午前5時45分ごろ、人吉市（小野宏明）

人吉市の防災アラート照明が運用された様子

頻発する増水に対する多様な防災アラート手段として装備

“夜間も危険が見えるアラート照明”を日常は“観光誘客の夜間景観演出”に利用

① 真っ暗が当たり前の河川から照明で水位を見守れる河川に更新

- ・ 橋梁や護岸の演出照明は、増水時には水位アラート照明として機能する。
- ・ 水位は瞬時に Web カメラで視認できるシステムを導入するなどを検討。

② アラート発信をリモートで調光操作ができるシステム

- ・ 汎用 PC にて遠隔操作によるアラート点灯ができるシステム。

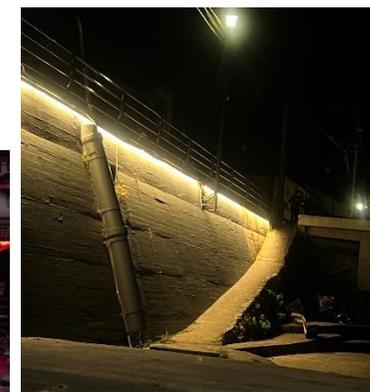
③ 観光地としての景観演出と防災サインを兼ね備えた照明整備

- ・ 照明制御と IoT 活用によって、平時は電球色で点灯し、増水時はアラートカラーとなる。
- ・ 様々なイベントやライトアップデーに自動でカラー運用がされる。

6-3 防災アラート照明の活用による防災力向上

● 橋梁と護岸を活用した新たな視覚的アラート手法として

令和4年度の天ヶ瀬温泉・あかりの社会実験において、護岸間接照明を利用したアラート照明の実装実験を実施。河川内遊歩道も明るくなりつつ、護岸に迫る水位も視認できると判断できました。



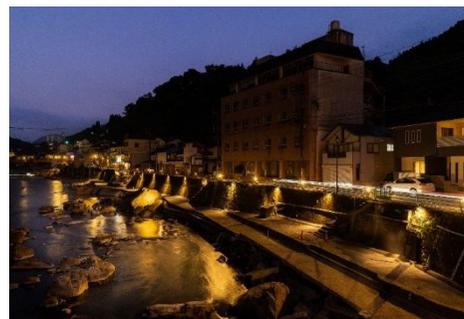
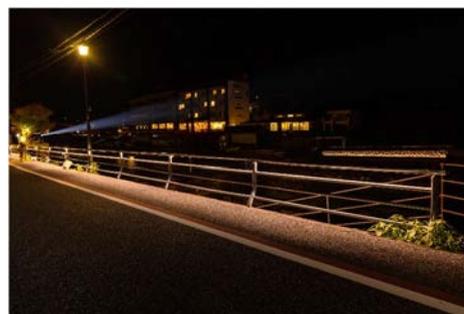
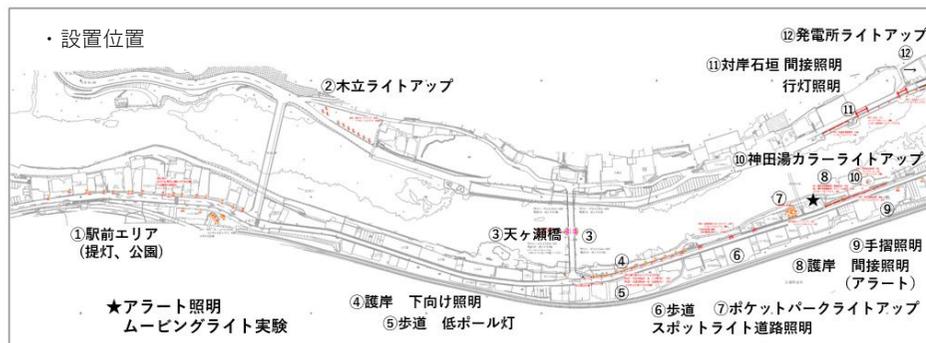
● 平常時は、電球色を基本としながら特別カラーでの点灯を自動（もしくは手動）で実施

防災アラート照明の色彩変化の事例（人吉市）



「ピンクリボンデー」用など6種類の特別カラーが選択でき、令和4年のサッカーワールドカップ時は、「サムライブルー」色の点灯が大きくメディアに取り上げられました。

6-4.参考) あかりの社会実験 記録 (令和4年)



水辺とまちなかで整備を検討したい照明手法を可能な限りで再現点灯し、住民と関係者の意見を収集し整備計画に反映することを目的としました。合わせて、広場の利活用・にぎわい創出の社会実験も実施され、天ヶ瀬温泉の将来ビジョンと仲間づくりの検討が行われました。

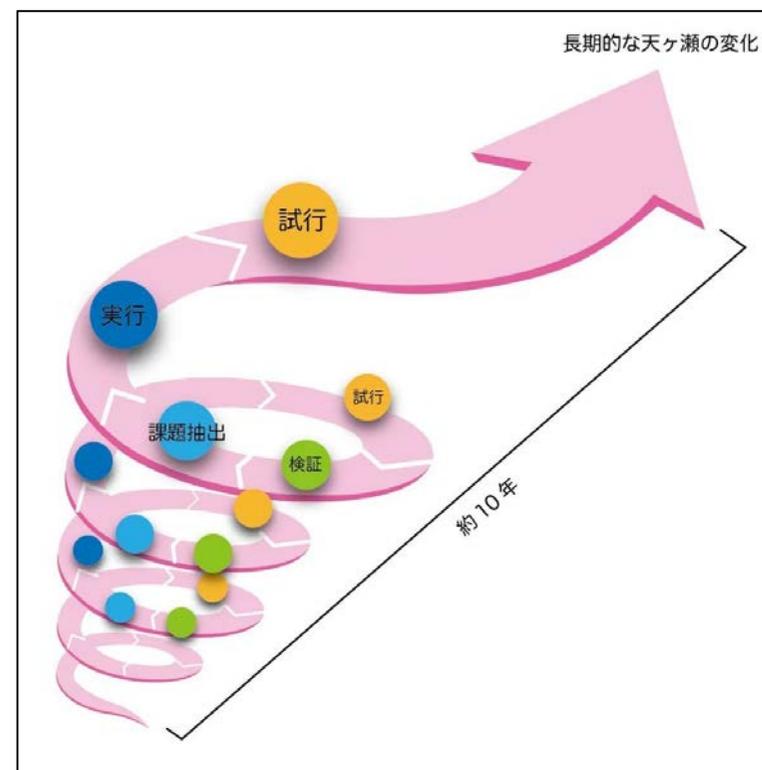
1. 計画推進に関する基本方針

計画を推進するにあたっては、行政と地域住民や事業者等の温泉街に関係する人が復興まちづくり計画に定められた将来ビジョンを共有し、長期的な視点で物事を考え、時代のニーズに合ったまちづくりを行います。

(1) 将来像の実現に向け『短期的アクションから長期的な変化を！』

社会実験等の試行的な取組を重ねることで、まちづくりに継続してチャレンジできる環境を整えることが重要となります。

『試行→検証→課題抽出→実行』をくり返して行うことで起きる小さな変化を積み重ねて長期的に大きな変化につなげます。



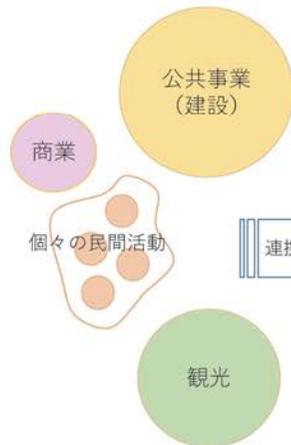
(2) 多様な関係者が連携『持続的なまちづくりの推進!』

まちづくりに携わる人が個々の取り組みをばらばらに行っているだけでは、大きな変化を生み出すことも継続的な活動も困難になります。取組の内容や実施時期などを関係者で共有し、地域住民や事業者等と行政が連携・協働したまちづくりを行い、継続的なまちづくりを推進していきます。

個々の活動→連携→力強いまちづくり・魅力的で選ばれる観光地を目指します。

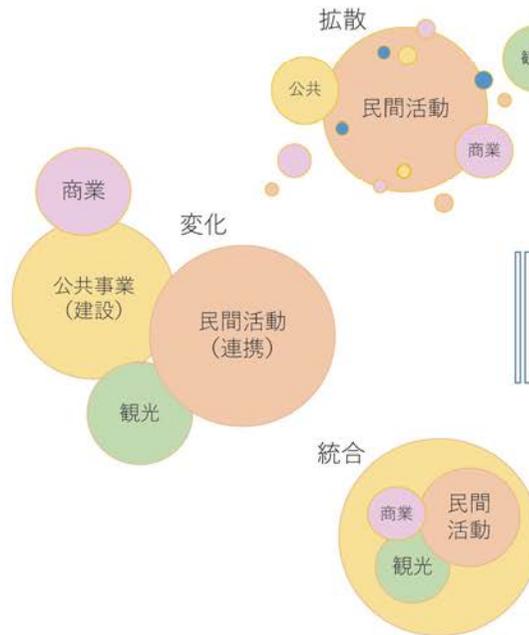
【短期目標の設定と達成】

すぐに着手できる個々のアクション実行



【中期目標の設定と達成】

多様な協働・連携により次のフェーズへ



【長期目標の設定と達成】

復興まちづくりが実現→継続的なまち運営へ



2.計画推進体制

(1) エリアマネジメント体制

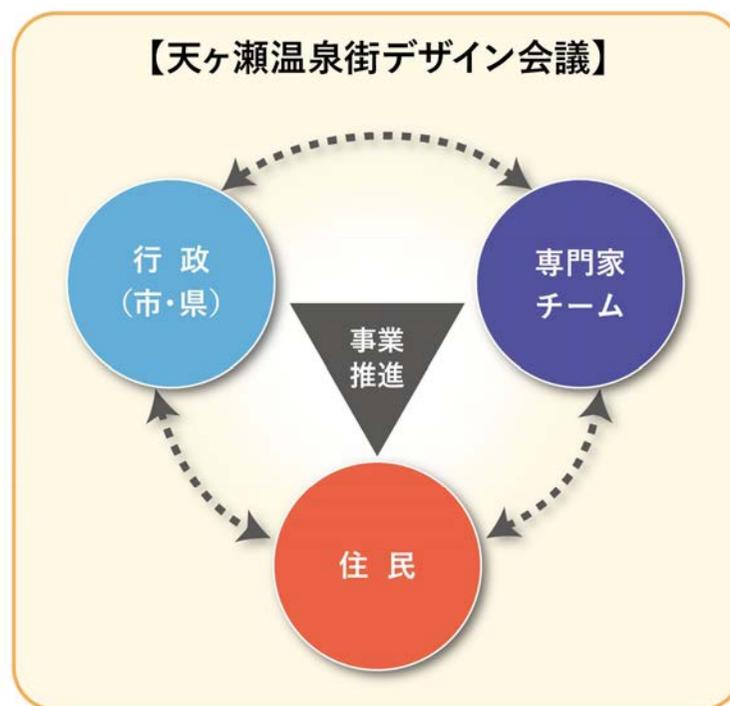
第4章の1で述べたようなまちづくりを推進するためには、温泉観光地としてまちを経営するという概念：エリアマネジメントが必要となります。多様な関係者が連携・協働してまちづくりに関わるエリアマネジメントの体制を構築し、企画立案から実施運用に至るまで様々な取組を一元化することで効率的で持続可能なまちづくりを推進します。



※『エリアマネジメントのすすめ』を参考に作成したイメージ図になります。
(出典:国土交通省)

(2) 計画に基づく取組の推進

計画に沿って行われる各種事業や取組の推進については、「天ヶ瀬温泉街デザイン会議」において精査・調整・提言を行うとともに、復興の進捗状況や地域の状況、市の財政状況などを総合的に考慮し、必要に応じて取組内容の見直しを提案します。



(3) 国や県との連携

天ヶ瀬温泉街の復興を成すには、本市の取組だけでなく国や大分県と連携が必要です。

被災地に対する国の支援策や助言を受けて推進します。

温泉街の中心を流れる玖珠川の河川改修事業に取り組む大分県と連携を密にし、河川空間を活かした災害に強い魅力ある温泉街の形成に取り組めます。

